

慶應義塾大学経済学部研究プロジェクト

最終成果論文（2016年度）

# ニュージーランドにおける二文化主義

ー博物館と児童文学を通してー

経済学部3年

秋山真弓子

（指導教員：柏崎千佳子）

# 目次

1.	序論	1
2.	ニュージーランドにおける二文化主義の成立過程と課題	3
2.1.	二文化主義の概要	3
2.2.	二文化主義の展開	4
2.3.	ワイタンギ条約の問題点と再評価	7
2.4.	二文化主義の課題	8
3.	経済面の二文化主義	11
3.1.	マオリーパケハ間の収入格差	11
3.2.	学歴・資格	12
3.3.	雇用関係・就労産業	13
3.4.	給与以外の収入	14
4.	文化面の二文化主義：国立博物館	16
4.1.	博物館と二文化主義の関係	16
4.2.	国立博物館テパパ設立の経緯	17
4.3.	運営方針・組織体系	19
4.4.	事業内容	20
4.5.	社会との関係性	22
4.6.	博物館の二文化主義を巡る論争	25
5.	文化面の二文化主義：児童文学	27
5.1.	ニュージーランドにおける児童文学の展開	27

ニュージーランドにおける二文化主義（秋山真弓子）

5.2.	児童文学賞に見る作品の傾向.....	30
5.3.	マオリを題材とした児童書.....	34
5.4.	マオリとパケハの血を引く児童書作家.....	36
6.	結論.....	39
	参考文献一覧.....	42
	付録.....	46

## 1. 序論

ニュージーランドで有名なものと言えば国技のラグビーである。その代表オールブラックス（All Blacks）が試合前に行うパフォーマンスは特徴的だ。それは先住民族マオリが戦闘前に士気を高めるために踊る「ハカ」をもとにして作られている。こうした社会へのマオリ文化の反映は、ニュージーランドを訪れるとよく見られる。例えば、マオリ文化のショーが開催されていたり、あらゆる案内表記にマオリ語も併記されていたりする。こうした背景にはニュージーランドが掲げる二文化主義（biculturalism）政策がある。これは一般的に二民族一国家を意味しており（武者 1991）、「マオリ」と「パケハ」の二つの民族の対等な関係性のことを指している。マオリはニュージーランドの先住民族であり、パケハはニュージーランドに住むヨーロッパ系の人々を指す。同じように先住民族が暮らすカナダやオーストラリアでは多文化主義を掲げており、二文化主義はニュージーランド独自の姿勢である。多文化主義を掲げる国では先住民族よりも移民の存在が目立つ印象を受ける。これに対してニュージーランドの場合は先住民族の存在が大きくその文化にも触れる機会が多くあり、国の二文化主義政策が成功しているように思われる。

本研究の目的は、この様に政策的に二文化主義が採用されているニュージーランドにおいて、社会生活にも二文化主義が体现されているのか考察することである。社会生活においては、とりわけ幼少期の経験がその後の価値観に強く影響すると考える。そこで、具体的には国立博物館と児童文学を取り上げる。この二つを挙げる理由は、国立博物館は政府の政策的影響を受けやすい一方で、児童文学はどちらかという自生的に潮流が生まれるものであり、違いが見られると考えたからである。この二つの比較に加えて、さらに社会経済面における二文化主義の様子とも対比させることとする。資料としてはニュージーランド政府、国立博物館、国会図書館のサイトや地域研究等でニュージーランドについて扱った文献を用いる。こうした本研究での分析を通じて、ニュージーランドにおける二文化主義は社会文化面ではある程度の成果を挙げている一方で、経済面ではそれが実現されていないということを明らかにする。

本稿の構成は次の通りである。まず2章にて、ニュージーランドの政策的な二文化主義がどの様なものかを検討する。ニュージーランドの歴史を

踏まえた二文化主義の展開を見た後に、二文化主義を検討する上で不可欠となるワイタング条約の詳細について触れ、最後に二文化主義が抱える課題についても考察していく。

続く三つの章では、二文化主義が社会生活においても体現されているのかについて考察していく。社会生活を経済面と文化面に分け、3章にて経済面を扱い、4、5章にて文化面を扱う。

3章では、主に2013年度の国勢調査をもとにして、マオリとパケハの収入について見ていく。まず、収入の大きな部分を占めている給与・賃金に関する資格、雇用関係・就労産業におけるマオリとパケハの比較を進める。次に、給与・賃金以外の収入を構成する項目にも注目し、マオリ・パケハ間の格差の有無を見ることで、社会経済的に二文化主義が体現されているのか考察する。

次の二つの章では、二文化主義の社会文化的な体現を考察すべく、4章で国立博物館、5章で児童文学を取り上げる。

4章では、まず二文化主義において博物館が果たす役割について検討する。その後で国立博物館テパパ設立の経緯や、運営方針・組織体系、事業内容について触れ、さらに、そうした博物館の働きがどのようにニュージーランド社会に反映されるのか見ていく。また、国立博物館に対する批判についても触れる。

次に5章では、はじめにニュージーランドにおける児童文学の展開を紹介し、児童文学賞を通して作品全体の傾向を確認した後で、個別の作品・著者について詳しく見ていく。またその中で、二文化主義を巡る葛藤についても考察する。以上の流れに乗り、本稿では政策的に二文化主義が実現されているニュージーランドにおいて、社会生活にも二文化主義が体現されているのか考察していく。

## 2. ニュージーランドにおける二文化主義の成立 過程と課題

本章では、ニュージーランドにおける二文化主義が何を意味しており、どのような成果が生まれているのかを見ていく。まず二文化主義の概要を説明した後に、ニュージーランドの歴史を踏まえたその変遷をみる。そして、二文化主義を語る上で不可欠となるワイタング条約の詳細に触れた上で、最後に二文化主義がはらむ問題点についても考察していく。

### 2.1. 二文化主義の概要

二文化主義（biculturalism）とは一般に「二民族一国家」と表現される。そこでは異なる二つの民族を結びつけるために一つの国家が「共同体」としての役割を担う。そうして国家統合を実現化させていく姿勢が二文化主義である（武者 1991, p. 38）。本稿の文脈では「共同体」がニュージーランド、そして二民族とは先住民族マオリ（Māori）とヨーロッパ系のパケハ（Pākehā）を指す。本来マオリという単語は「普通の、通常の」という意味をもっているに過ぎず、民族の呼称ではなかった。それが先住民族の総称として使われるのはヨーロッパ人との接触後<sup>1</sup>のことで、「よその」を意味するヨーロッパ系の人々パケハに対置して使われることとなる<sup>2</sup>。2013年5月に実施された国勢調査によれば、総人口 4,242,048 人のうちマオリが 598,602 人（14.9%）、パケハが 2,727,009（68.0%）となっている<sup>3</sup>。人口に大きく差はあるものの、ニュージーランドではマオリ文化とパケハ文化とが対等に認められている。ただし、このような二文化主義の関係が本格化

---

<sup>1</sup> 原田（2005）によると 1830 年以降とされている。

<sup>2</sup> 現在のニュージーランドではマオリとパケハ以外にも南太平洋・アジア・アフリカからの移民が増え、人口の約 20% を占めているが、彼らはパケハには含まない。

<sup>3</sup> 本稿では国勢調査にて所属民族を Māori と選択した人をマオリ、New Zealand European と選択した人をパケハとして数えるものとする。なお、民族候補の中から複数選択することができるため、重複して数えられている可能性もあるが、ニュージーランドが公式にこの数値を用いているため本稿でもそれに倣う。

したのは 1980 年代以降であり、それ以前は非公式的に政府はパケハ文化に偏重した単一文化主義（monoculturalism）を取っていたとされている。そこで次節では、建国の歴史を踏まえつつ二文化主義がニュージーランドで進展した経緯を考察していく。

## 2.2. 二文化主義の展開

マオリとイギリス人が初めて接触したのは 1796 年のことであった。文化の違いから初期には犠牲者を出したものの、後に交易を通してマオリとパケハの交流が始まり、その中で宣教師との接触も見られた（青柳 1997）。マオリとパケハの交流が見られた頃は、両民族は別々の文化の中で生活しており、互いに干渉することなく調和のとれた生活を送っていた。また、マオリとパケハが互いのコミュニティに所属して生活しているケースもあり、こうした様子はマオリ－パケハ間の最初の二文化主義的な関係として捉えることもできる。

しかし、こうした調和の取れた関係は 1840 年に締結されたワイタンギ条約（Treaty of Waitangi）によって終わりを迎える。イギリス国王とマオリ首長たちとの間で結ばれた本条約のイギリス側の目的は、主権と資産に対する権限をマオリからイギリス国王へ譲渡することにあった。それまでマオリとの共存を維持していたイギリスがこの時期に条約締結を進めたのは、フランスがニュージーランドの植民地化を図っているという噂が当時挙がっていたことが背景にあると言われている。条約締結によりニュージーランドの植民地化が進むと入植者の人口が増し、それまでマオリの方が多かった状況が逆転した（内藤 2008）。こうしてワイタンギ条約の締結は、イギリスによるニュージーランドの植民地支配強化につながった。

この様な展開を見ると、ワイタンギ条約の内容はマオリ側には不利でしかないように思われる。そうした条約にマオリが調印した背景には、イギリス側とマオリ側とで条文解釈の相違が生じていたことが挙げられる。両民族が自身にとって有利な内容として条文を解釈したため、マオリも調印に納得したのである。そのため、後にマオリの権利が主張される際には、この条約が必ず参照される。そこで、条約の内容や問題点については次節にて詳しく述べる。

ワイタンギ条約締結以降、マオリは圧迫されることとなる。原田（2005）によると、1860 年代から 70 年代初めに掛けてはイギリス植民地政府とマオリとの間で土地を巡り武力紛争（Land Wars）が繰り返される。その中で

マオリは反乱民と位置付けられその土地は没収され、入植者への売買が促進された。また、マオリが土地の返還訴訟を起こした際にワイタンギ条約を根拠に挙げると、法廷ではワイタンギ条約が全く無効であると位置づけられた（内藤 2008, p. 383）。このことから、イギリスがマオリとパケハの関係性を定めたワイタンギ条約を事実上無視していたことが読み取れる。こうした抑圧された生活に加えて入植者との接触によってもたらされた感染症や主食の変化に伴う肥満化等の要因から、マオリの人口は 19 世紀前半には 10～15 万人と推計されたが、19 世紀末には約 4 万人と三分の一程に減少した（原田 2005, pp. 150-151）。

一方で、マオリは抑圧されるばかりではなく、自身の置かれている現状を打開しようと抵抗運動を展開した。これには二つの要因がある。一つは、入植者によってもたらされた新しい作物や畜産の生産に移行したことで経済的な余剰が生まれた点。もう一つが、植民地の移動・通信手段への参画によって、遠距離の部族の結びつきが促進された点である。こうした入植者との接触が契機となって、部族同士が連携するようになり集団での抵抗運動を生み出した（原田 2005, pp. 149-150）。具体的には先に述べた土地買収に関する抵抗や 1860 年代以降はマオリの伝統宗教とキリスト教が結び付いた宗教運動も見られた。この背景には、植民地化の過程でのマオリ社会の伝統喪失への危機感があり、権利回復を訴えるだけでなく暴力的な抵抗も行われた。そうした宗教色は 1890 年代には薄れ、政治運動が本格化する<sup>4</sup>。それまではパケハとの対決やマオリの自治主張が訴えの中核をなしていたが、ここではマオリの劣悪な社会状態の改善や近代化が目標に掲げられた。

こうした抵抗運動の成果として象徴的なものが 1867 年から展開した選挙制度である。ニュージーランドでは比例代表と小選挙区の二つの方法で候補者が選ばれる。小選挙区には一般選挙区の他にマオリ選挙区が設けられており、マオリ人候補者が立候補し、マオリ人によって投票が行われる（矢部 2003, p. 147）。この様に、一定数のマオリ議席が保障されており、政治においてもマオリの意見が無視されないような工夫がなされた。この制度は現在でも続いており、二文化主義的な政策の一つとなっている。

マオリの抵抗運動や第二次世界大戦での活躍が実を結び、これまでマオリの権利の争点とされてきたワイタンギ条約の再評価が 1975 年に実現する。この背景には、先に述べたマオリ側の努力と合わせて、1973 年イギリ

---

<sup>4</sup> ヤング・マオリ・パーティと呼ばれる西欧流の教育を受けたマオリ青年たち（パケハとの混血）が中心となって構成されていた組織が運動を率いていた。

スの EC 加盟によるニュージーランドらしさを求める機運が生まれたことも挙げられる（内藤 2008, p. 384）。1980 年代後半のロンギ労働党政権のもとでは政策的な二文化主義と位置付けられた改革が行われ、ニュージーランドにおいて二文化主義が本格化していったのである<sup>5</sup>。

以上の様な経緯により現在のニュージーランド社会では二文化主義的な取り組みがなされており、その例を二つ挙げる。第一に、1987 年にマオリ語が英語と並んで公用語として認められた点である。小杉（2001）によれば、1970 年代にはマオリ人口の数パーセントしかマオリ語を流暢に話せる者がおらず、民族運動のキーワードとして土地とともに言語の回復も掲げられていたという。90 年代にはマオリ語による新聞の出版も見られ、また多数の地名もマオリ語に改められた。さらに、重要機関の名称や国勢調査等の公式文書は英語とマオリ語が併記されており、マオリへの関心の高まりが伺える。こうした言語の発展は、後の章で述べるマオリに関連した文学作品の本格的な登場にも通ずるものがあるだろう。ただし、岡崎（2015）でも述べられている通り、一般の社会生活ではマオリ語はそれ程使用されておらず英語が主となっている<sup>6</sup>。また、マオリ語を第二言語として用いる人の割合は、2006 年の 23.7%から 2013 年には 21.3%に減少している。加えて、マオリ語話者の約 40%は 65 歳以上の人々であるため、今後さらに話者が減少することが予想され、留意が必要であろう。

次いで第二に、学校教育においてもマオリの言語や文化が重要視されている点である。1989 年の教育法（Education Act 1989）によって定められた全国教育指針（National Education Guidelines）の中で、全国共通の教育目標（National Education Goals）が定められた。全 9 つの項目の中で、ひとつにはマオリによるマオリ教育の推進が掲げられている<sup>7</sup>。20 世紀中頃まで同化政策的な教育が進められてきたが、マオリ独自の文化を教育に反映するという動きが見られたのは特徴的であろう。この目標は 2004 年に改正され、新たに「ニュージーランド国民の多様な民族的・文化的背景を尊重」し、なかでも「マオリの人々が特別の地位を占めていることを認める」という項目が追加された。この点からマオリ独自の民族教育を推進するだけでなく、パケハとマオリがともに互いの文化を尊重し合う関係性を広め

<sup>5</sup> マオリに対して二文化主義的な公共サービスを提供するとともに、マオリの声をより反映させようとした（内藤 2008, pp. 394-395）。

<sup>6</sup> 2013 年 5 月に実施された国勢調査によれば、マオリの中で 96.4%（567,078 人）は英語を主に用いている。

<sup>7</sup> 具体的には杉原・大藪（2005）にて、就学前の Te Kohanga Reo、初等中等の Kura Kaupapa Maori、高等の Wananga と呼ばれる教育機関が挙げられている。

ようとする動きが読み取れる。例えば、マオリ文化の理解促進のためには一般の学校でもカリキュラムの中にマオリ語やマオリ文化に関する授業が設けられており（石原 2004, p. 5）、教育においても二文化主義が進んできていると言えるだろう。

現在のニュージーランド社会では二文化主義が広まり、マオリへの関心が高まっている。しかし、先にも述べた通り 19 世紀中頃から長い間マオリはパケハによって抑圧されていた。そうした状況の転換点にワイタンギ条約の再評価があり、次節にて詳しく考察していく。

### 2.3. ワイタンギ条約の問題点と再評価

1840 年 2 月 6 日に締結されたワイタンギ条約は、マオリが権利を主張する際に必ず触れられるもので、条約を巡って様々な議論が起こった。その最大の争点は、締結当時のマオリーパケハ間で条約内容の解釈が異なっていた点にある<sup>8</sup>。英語版の条約文書が作られた後に現地事情に詳しい宣教師らによってマオリ語版が作られたワイタンギ条約は、本来の意味を適切に訳すことが出来ず矛盾が生じてしまったのである（内藤 2000）。

ワイタンギ条約は 3 条から構成されている。英語版では第一条に主権の譲渡、第二条にマオリの所有資産に対するイギリス国王の権利、第三条にマオリのイギリス国民としての特権の付与が記されている。内藤（2000）は、ワイタンギ条約が英語版とマオリ語版の二つが存在すると言えるほどその内容が相違していると論じる。両民族の言葉の捉え方の違いから二つの事柄に対して解釈が異なってしまった。

その一つが、主権の譲渡に関しての相違点である。英語版の第一条で「sovereignty」と表されている「主権」は、マオリ語版では「kawanatanga (governorship)」と訳されており、それは「監督・統制すること」であって主権ほど強い意味はもたない。また、この単語はマオリが日常的に用いるものでもなかった。この一方で、マオリ語版の第二条では主権と同等の意味をもつ「rangatiratanga」という言葉が使われており、マオリ首長がニュージーランドのあらゆるものに対して権限を行使することをイギリスが認めると記されている。この点からマオリは、条約によって自身の伝統

---

<sup>8</sup> その他にも原田（2005）では、締結したマオリ首長が一部でしかないという問題点や、イギリスのその他の植民地では共存的な関係を記した条約を締結していないというニュージーランドの特殊性が述べられている。

的な権利が保障されていると考えた。しかし英語版の第二条では、主権ではなく「所有（possession）」が保障されているに過ぎなかったのである。

そしてもう一つが、第二条に記載されている資産の範囲に関する相違である。英語版では具体的な資産の名称が挙げられているのに対して、マオリ語版では「taonga」という単語にまとめられている。「taonga」は有形無形問わずあらゆる文化的価値のあるものを指し、拡大解釈が可能である。未開拓でマオリにとってそれほど重要ではないとイギリス人にとって感じられたため英語版の条約では資産に含まれなかった森林や原野も、マオリにとってはアイデンティティと結びつく重要な場所であり、それも「taonga」に含めて考えられていた。この点も要因となり、前節にて述べたような土地をめぐる闘争にもつながったのである。

この様に矛盾を抱え、形骸化していたワイタンギ条約は 1975 年に施行されたワイタンギ条約法によって正式に再評価されることとなる<sup>9</sup>。ワイタンギ条約法には二つの特徴がある。一つが、先に述べた条約に関する解釈の相違を認めた点である。ワイタンギ条約を巡る矛盾の原因が明確になることで、マオリの地権に関する論争解決への足掛かりとなった。そしてもう一つが、ワイタンギ審判所（Waitangi Tribunal）を創設した点である。ワイタンギ審判所の役割は「ワイタンギ条約の実際の適用に関して、マオリが提起する請求について勧告し、一定の事項が条約の原理と合致するかどうかを決定する」（内藤 2000, p. 337）こととされている。設立当初は審判対象が 1975 年以降の法律や政策、実務に限られていたが、1985 年の改正によって範囲が 1840 年以降と大幅に拡大し、対象も全ての行為が含まれるようになった。この審理の結果は勧告されるだけで強制力はない。しかし、それだけでも社会の関心を集めるには十分であり、不当な扱いは是正の原動力となったのである<sup>10</sup>。

## 2.4. 二文化主義の課題

イギリスによる入植が始まって以来マオリは圧迫されたものの、現在ではニュージーランド社会における地位を獲得し二文化主義が順調に進んでいるかのように見える。しかし、二文化主義に対する批判はあり、本

<sup>9</sup> 前年の 1974 年には、ワイタンギ条約の締結日（2 月 6 日）が国民の祝日に認定された。

<sup>10</sup> 内藤（2000）はワイタンギ審判所が社会の関心を集めた例として、1983 年のモツヌイ請求と 1984 年のマヌカウ請求が挙げている。

節ではパケハ側の意見、マオリ側の意見、そして二文化主義そのものに対する意見の三点を挙げて考察していく。

第一に、パケハから挙がる二文化主義に対する批判を見る。二文化と掲げつつもマオリに特化した政策が提供される点は、一部のパケハには不平等に感じられる（原田 2005, p. 144）。マオリであることだけが理由で受けることのできる行政サービスに対して、パケハへの人種差別であるという意見もある。こうした受け取るサービスの違いによって生じる不満の根底には、パケハの二文化主義に関する姿勢が関係している。シブレイとリュウ（Sibley and Liu 2004）は、社会心理学的な観点からパケハの二文化主義に対する意識を調査している。パケハの中で「原則としての二文化主義」に反対する人はほとんどいない<sup>11</sup>。一方で、「具体的な資源を分けるという意味での二文化主義」には 76%のパケハが反対をした<sup>12</sup>。この様に、二文化主義という言葉は好意的に受け取られても、その影響が自身に及ぶとなると受け入れづらいものになるのである。

次いで第二に、マオリの間でも二文化主義に対する意見は分かれている。現在では大半のマオリは伝統的な居住地域を離れ、部族集団を意識する機会が少ない都市部に住んでいる。そのため、都市のマオリ達は部族経由で行われる賠償の制度変革を求めている。一方で、部族意識の強いマオリ達はこの集団にマオリとしてのアイデンティティがあるとして、都市マオリを認めていない（内藤 2000, p. 341）。また、マオリはもともとパケハに対置して作られた総称であるということが背景となって生じた問題もある。一部の部族の意見がマオリ全体の意見として一括りにされ、個別のマオリの意見が反映されづらいという見方もある。こうしたマオリ内での「マオリ」のあり方、認識の違いによっても意見が分かれるのである。

そして第三に、二文化主義という国家戦略自体への批判もある。ニュージーランドでは現在、人口の約 20%がマオリでもパケハでもない移民とその子孫で占められている。こうした多民族化が進む中で、ニュージーランドは公的には多文化主義政策をとっていない（内藤 2008, p. 391）。この状況に対してバイカルチュラル（bicultural：二文化的な）に替わるバイナショナル（bi-national：二国民的な）というものも注目されつつある<sup>13</sup>。これは一つの国の中に二つの国民（nation）を想定するというもので、片側にはマオリ、もう片側に多文化的なマオリ以外の人々が置かれる。これに

<sup>11</sup> 賛成 53%、反対 3%。

<sup>12</sup> 賛成派 3%。

<sup>13</sup> この考え方は、政府公認の二文化主義解説サイト（Story: Biculturalism）でも述べられている。

より、多民族の中で先住民という位置が薄まるというマオリ側の意見を考慮しつつ、一方では増加する移民への対応が取れるという体制だ。ただし、これでは移民の地位を高めるためにマオリではなくパケハの地位が相対的に下がることを意味し、実現可能性は不透明である。

以上三つの視点から、二文化主義の課題を考察してきた。たしかにニュージーランドにおいて二文化主義は未成熟であり、各民族の立場から様々な問題点が挙げられている。しかし、外から見るとニュージーランドにおけるマオリは他国の先住民族に比べて強い印象で、国の中でバランスが取れている様に見受けられる。この点から、二文化主義的なこれまでの政策には一定の効果があったと考える。

本章では、批判や課題がありつつもニュージーランドで二文化主義が展開している様子を見てきた。次章以降では、政策的な二文化主義の潮流だけでなく、社会生活において二文化主義がどの様に体现されているか考察していく。

### 3. 経済面の二文化主義

前章では、ニュージーランドにおける二文化主義という考え方について論じた。二文化主義の展開を考察することで、二文化主義が批判の対象になりつつもマオリへの関心を高めることにつながっており、ある程度の成果を挙げていることが分かった。本章では、ニュージーランド国勢調査を参考にマオリとパケハの経済格差を見ることで、実際の社会経済的な生活においても二文化主義的な傾向が見られるのか考察していく。

#### 3.1. マオリーパケハ間の収入格差

マオリーパケハ間には収入格差が見られる。2013年の国勢調査<sup>14</sup>によると年収の中央値は、マオリがNZ\$22,500なのに対してパケハはNZ\$30,600と開きが見られる。2006年の国勢調査と比べても、マオリの年収は1.08倍しか伸びていないが、パケハは1.22倍増加している。（図表1）マリオットとシム（Marriott and Sim 2015, pp. 18-19）の調査でも、2003年と2013年を比較するとマオリーパケハ間の収入格差が拡大傾向にあることが述べられている。また、低所得者と高所得者の割合も二グループ間で異なる。年間NZ\$20,000以下の収入しかない低所得者の人口に占める割合を比べると、マオリが46.3%でパケハは35.0%である。一方で、年間NZ\$70,000以上の収入を得るマオリは3.1%しかいないのに対して、パケハは15.4%と低所得者よりも差が大きい。ここから、マオリーパケハ間の収入格差が拡大傾向にあり、特に高所得者層における格差が大きいことが分かった。

図表1. マオリとパケハの年収（中央値を比較）

	2006年(NZ\$)	2013年(NZ\$)	増加割合
マオリ	20,900	22,500	1.08倍
パケハ	25,100	30,600	1.22倍

ニュージーランド国勢調査 2006年度・2013年度より筆者作成

収入に占める割合の高い項目を見ると、マオリとパケハ共通して給与・

<sup>14</sup> 調査対象は15歳以上、マオリとパケハの分類に関しては第2章の注釈3を参照。

賃金が約 60%と半数以上を占めている<sup>15</sup>。そこで次節からは、給与・賃金に影響を与えると考えられる学歴・資格、雇用関係・職業の二点に着目して経済格差の要因について考察していく。

### 3.2. 学歴・資格

第一に、高等教育や職業訓練を修了したことを示す公的な資格（qualification）においては、収入ほど格差は大きくない。2013年の資格保有者<sup>16</sup>はマオリでは 66.7%で、パケハでは 78.7%だった。また、2006年と比較すると、マオリが 60.1%に対してパケハは 73.8%と、マオリの方が増加傾向にあることが分かる。（図表 2）また、マリオットとシム（Marriott and Sim 2015, p.13）の調査にもあるように、マオリーパケハ間の資格格差は 2001年から 2012年にかけて縮小している<sup>17</sup>。

図表 2. マオリとパケハの学歴・資格保有率

	2006年 (%)	2013年 (%)	増加割合
マオリ	60.1	66.7	1.11 倍
パケハ	73.8	78.7	1.07 倍

ニュージーランド国勢調査 2006年度・2013年度より筆者作成

この様に、マオリーパケハ間の収入格差に比べて資格では差が大きくはなく、現状ではその差が縮小傾向にあることが分かる。ただし、ここで対象になっている資格の幅は広く、内訳までは分からない。そのため、マオリの保有資格が専門学校や職業訓練校に偏り、一方でパケハが大学に偏っている可能性もある。そのため、保有する資格格差が縮小しても収入に反映されていないと考えることもできる。

<sup>15</sup> 2013年度国勢調査より、マオリでは 58.3%、パケハでは 58.1%を給与・賃金が占めている。

<sup>16</sup> これは国勢調査 2013年度の資格項目（qualification）にて回答された数値を基にしている。ここでは大学、専門学校、職業訓練校等の修了資格、または資格機関（New Zealand Qualifications Authority : NZQA）が定めた資格保有者を指す。

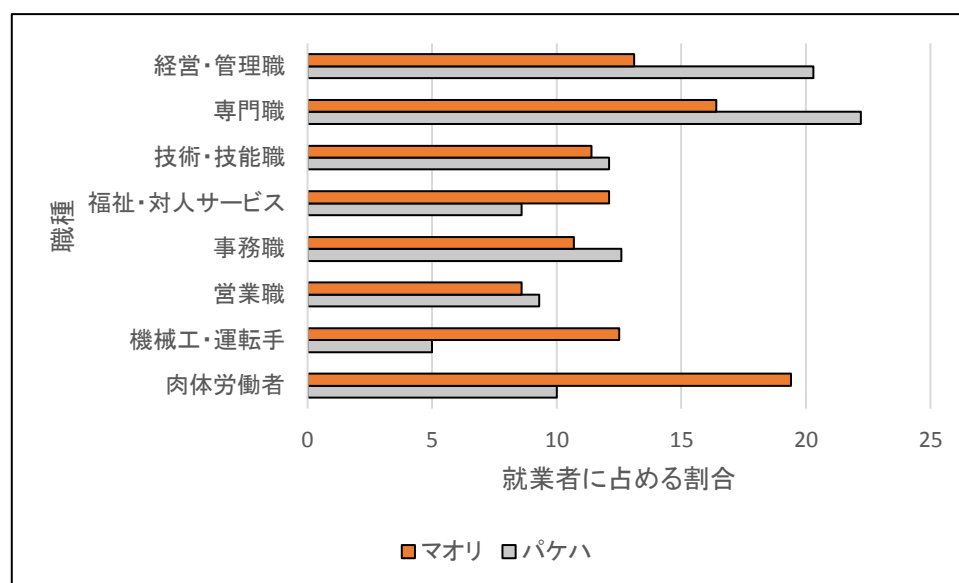
<sup>17</sup> 2001年から 2012年では、パケハの伸び率が 1.2 倍（68.5%から 82.1%へ）に対して、マオリは 1.5 倍（40.6%から 60.9%）となっている。

### 3.3. 雇用関係・就労産業

第二に、雇用関係・職業を見ていく。マリオットとシム（Marriott and Sim 2015, p.15）の調査報告書では、2003年から2012年に掛けての失業率の変化について言及されている。パケハは3.2%から5.5%にやや上昇した一方で、マオリは10%から14.8%へと大幅に上昇しており、その格差が大きくなっている。こうした失業率の格差以外にも、仕事を持っているマオリーパケハ間にも労働状況に異なる傾向が見られる。そこで本節では、具体的な雇用関係と就労産業におけるマオリとパケハの格差の要因を考察していく。

はじめに雇用関係を見る。2013年の国勢調査によれば、仕事を持つマオリの中で被雇用者として働く人が88.3%に対して、雇用主は3.1%に留まる。一方で、パケハでは被雇用者割合は76.8%だが、雇用主は6.6%とマオリを上回っている。また、パケハでは経営・管理職や専門職、事務職員として働いている割合が高い。その一方で、マオリでは経営者や専門職よりも肉体労働者が占める割合が高くなっている。（図表3）こうした雇用関係の差や職種の違いは、マオリーパケハ間の給与及び収入の差の要因の一つになっていると考えられる。

図表3. マオリとパケハの職種割合

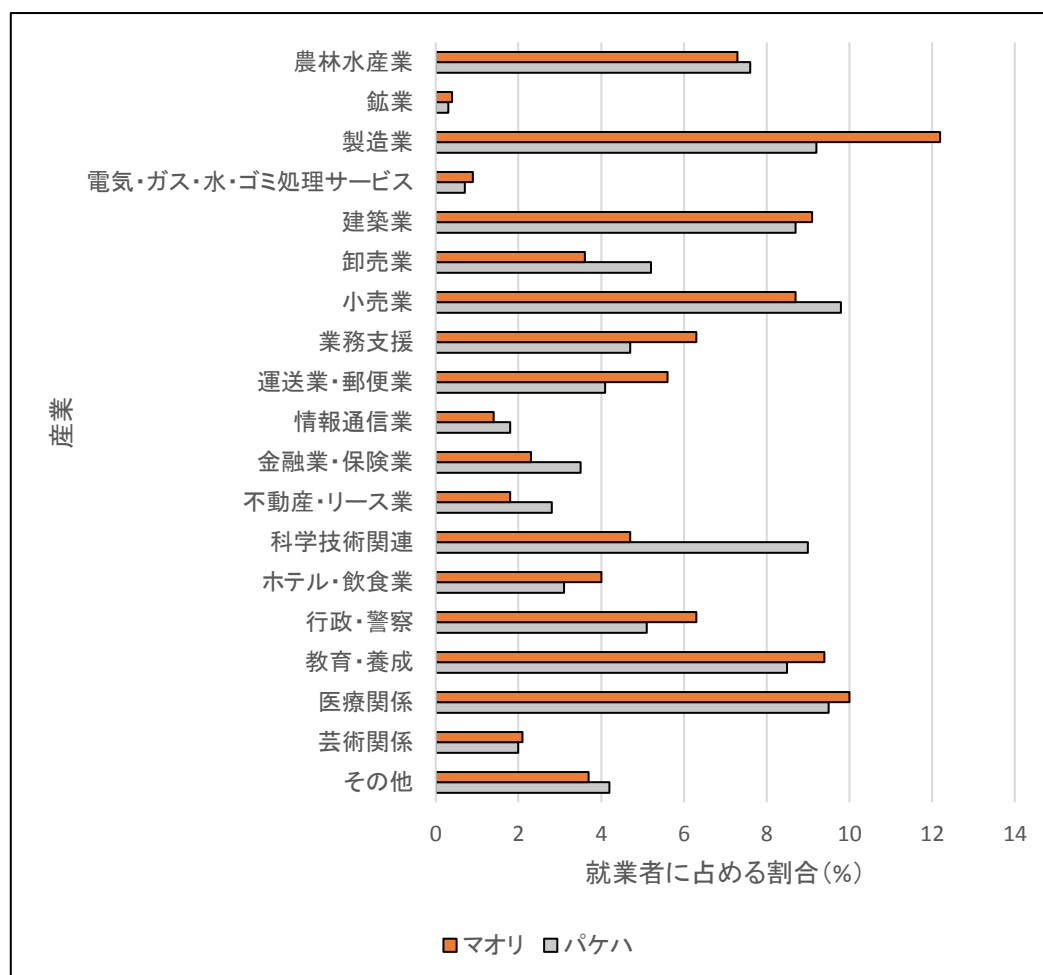


ニュージーランド国勢調査 2013 年度より筆者作成

次に産業別の就業割合について見ていく。マオリと比較してパケハの方が就業割合の高い産業には、科学技術関連や金融業・保険業、卸小売業が

見受けられる。対して、マオリに特徴的なのは製造業に従事する人の割合が高い点である。（図表 4）この様な就労産業の違いも、給与の違いに反映されると考えられる。

図表 4. マオリとパケハの産業別就業割合



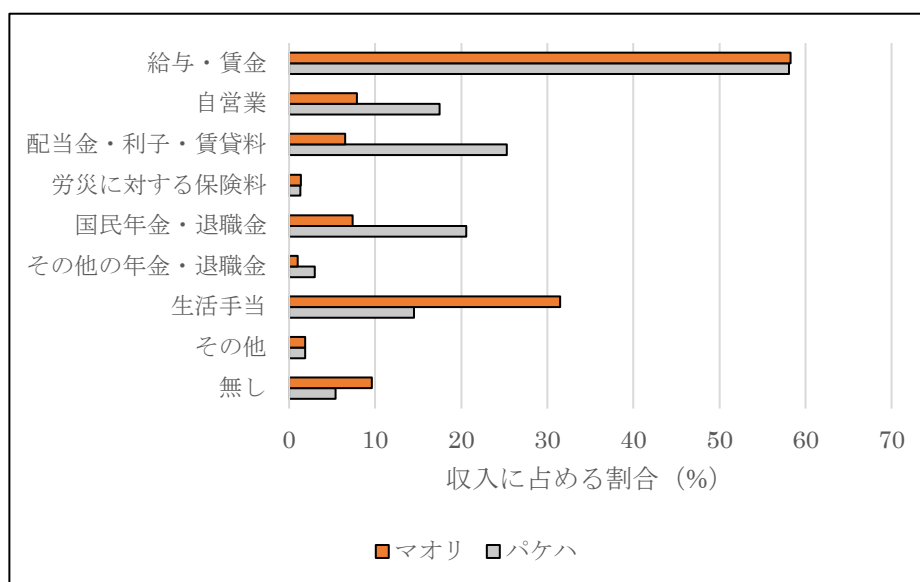
ニュージーランド国勢調査 2013 年度より筆者作成

### 3.4. 給与以外の収入

前節まで、マオリーパケハ間の就業状況に関する諸格差について考察してきた。そこで、本節では給与以外の収入源に着目する。収入に占める割合の高い項目を見ると、給与・賃金以外の収入源がマオリとパケハでは異なっていることが分かる。マオリに関しては、生活手当の占める割合（31.5%）と収入が無いと回答する人の割合（9.6%）がパケハに比べて高い。一方パケハは、自営業や配当金、年金等から収入を得ている割合が高

い<sup>18</sup>。(図表 5) この点から、マオリーパケハ間では保有する資産に差があることが伺える。故に、マオリはパケハに比べて社会生活の中で自身で生活資金の全てをまかなうことが難しいと言えるのではないだろうか。

図表 5. マオリとパケハの収入源比較



ニュージーランド国勢調査 2013 年度より筆者作成

本章では、マオリーパケハ間の収入格差を見ることでマオリの経済的な地位について考察してきた。その中で、留意点はあるつつも資格面での格差は縮まる一方で、収入格差は存在しその背景の一つに就労状況の違いが見られた。こうした現状から、経済的にはニュージーランドにおいて二文化主義が体现されているとは言えない。しかし、前章でも述べた通り一般的にはニュージーランドは二文化主義の国と言われており、政府もそれを掲げている。そこで、以降二つの章にわたってマオリの社会文化的な地位を考察することで、二文化主義がニュージーランド社会でどの様に体现されているのかを考察していく。

<sup>18</sup> 複数回答が可能のため、重複して数えられている可能性がある。

## 4. 文化面の二文化主義：国立博物館

本章では、ニュージーランド社会において二文化主義がどのように現れているのか博物館を通して見ていく。取り上げるのはニュージーランドの国立博物館テパパ・トンガレワ（*Museum of New Zealand Te Papa Tongarewa*）である。テパパは 1998 年設立時から二文化主義を理念に掲げている。そこで、この国立博物館が如何に二文化主義を体現し、その活動によって社会に二文化主義を浸透させているのか考察する。本章では、まず博物館と二文化主義の関係を検討し、その後テパパ設立の経緯、運営方針・組織体系、事業内容、社会との関係性を見ていく。また、博物館の二文化主義を巡る論争についても言及する。

### 4.1. 博物館と二文化主義の関係

博物館と二文化主義との関係を端的に示す例が博物館協会（*Museums Aotearoa*）<sup>19</sup>の公式文書に書かれている。すなわち、協会は博物館を「ワイタング条約を正当に評価しようという国全体の動きを先導する重要な機関」<sup>20</sup>と位置付けている。また、博物館の主要な役割は「ニュージーランド人に自らのアイデンティティを学ぶ機会を与えること」<sup>21</sup>であるとしている。この様に、博物館はニュージーランド人に対して、二文化主義的遺産（*bicultural heritage*）を探求させる姿勢を示しているのである。ニュージーランドでは全ての博物館がこの博物館協会に加盟する必要があり、二文化主義の体現はニュージーランドの博物館が共通して担う社会的役割と言えるだろう。この様にニュージーランドでは博物館において二文化主義が打ち出されているが、これは 1980 年代頃から始まったマオリ文化再評価の潮流を反映したものであり、19 世紀、20 世紀前半ではマオリ文化の取り上げ方は異なっていた。

1860 年代以降、ニュージーランドでは博物館が次々と設立されたが、マ

---

<sup>19</sup> 1998 年設立

<sup>20</sup> *A Strategy for the Museums Sector in New Zealand* (2005. p.5) より  
“Museums are also leading agents in the nation’s move towards recognition of the Treaty of Waitangi, …”

<sup>21</sup> 同上より “A primary role of museums in our communities is that they are places where New Zealanders can learn about their identity as individuals …”

オリの展示品は所有者の背景とは無関係で陳列されていたり、パケハ文化とマオリ文化が分断されていたりと、非マオリ側の観点から展示がなされていた。こうした見せ方に対して新たな展示のあり方に向けた転換点となったのが、1980年代のテ・マオリ展である（青柳 2008, p. 42）。これは国内の主要博物館から借用し、マオリの宝物（タオンガ, treasured artifacts）を体系的に世界に紹介した最初の催しで、1970年代半ばに検討され始めた。テ・マオリ展の実行委員会の下部組織にはマオリ委員会も設けられ、各展示品の解釈や儀礼の方法等のあらゆる面でマオリの意見が反映されるようになっていたという。1984年9月から86年6月までアメリカでテ・マオリ展が開かれると、その高い芸術性が評価された。その成功を経て、1986年8月から87年5月までニュージーランドでも開催され、総参観者数は92万人に達したという<sup>22</sup>（青柳, 2008, p. 43）。また、同時期にはニュージーランド国立博物館（The National Museum、テパパの前身）にてマオリ系職員の採用が進められたこともあり、1980年代はマオリ自身为中心となってマオリ宝物の展示に関われる機会が拡大した時期と言える。こうしてニュージーランド社会においてマオリが正当に位置づけられる様になってきた頃、二文化主義をより明確に打ち出した博物館が設立された。それが国立博物館テパパである。

## 4.2. 国立博物館テパパ設立の経緯

本節ではどのようにテパパが設立されたのかその経緯を見ていく。同博物館はニュージーランド国立博物館（The National Museum）と国立美術館（The National Art Gallery）の収蔵品を合わせて、新たな展示方法を構築した新国立博物館である。

1865年ニュージーランド国立博物館の前身である植民地博物館（The Colonial Museum）<sup>23</sup>が開館した。当時の展示方法は前節で述べたような品物の背景が無視されたものであった（青柳 2008）。1936年以降、元植民地博物館と国立美術館が同じ建物内に置かれるようになった。1980年代には利用者が増加し新たな施設建設の必要性が生まれる。これがテパパ設立に向けた動きの始まりである。1988年に新国立博物館建設のための委員会が設置され、政府主導でプロジェクトが進められていた。1992年には「ニュージーランド新博物館テパパ・トンガレワ法（The Museum of New

<sup>22</sup> 当時のニュージーランドの人口は約 360 万人

<sup>23</sup> 1907年 The Dominion Museum、1972年 The National Museum に改称

Zealand Te Papa Tongarewa Act 1992)」が議会で承認され、同法律をもとに1998年2月にテパパは開館した。

1992年法では、テパパが二文化主義を体現すべく様々なことが規定されており、その中で特徴的な三点を紹介する。第一に、マオリとパケハが互いに尊敬しあい協調すべきであると前面に押し出している点である。テパパの機能の一つに、各伝統や文化遺産を認め、両者がニュージーランド国民のアイデンティティ形成に貢献することが挙げられている。次に、二文化だけに留まらずその他の多様な伝統や民族も認め合うことが記されている点である。これは、マオリだけでなく近年増してきたマオリ以外の太平洋圏出身者を含めた多様なニュージーランド社会を反映しているであろう。そして最後に、「マオリ系」と「ヨーロッパ系」が本文中で並列される際は必ず「マオリ系」が先に表記される点である<sup>24</sup>。先住民としてのマオリと後から入植したパケハという対比が表現されているのではないだろうか。

以上のように、テパパ設立時にはマオリ側への配慮が濃く見られる。20世紀半ばまでパケハに圧迫されマオリ文化は表舞台に上がれなかったが、国立博物館テパパの開館は二文化主義という概念の定着に寄与し、1980年代からのマオリ再評価の流れを後押ししたと言える。

二文化主義を通してマオリ文化を振興するという姿勢は、博物館の名前にも象徴的に表れている。正式名称‘Te Papa Tongarewa’はマオリ語で「宝の入れ物 ‘container of treasures’」という意味で、その解釈は「母なる大地であるニュージーランドから生まれた尊いモノとヒトの入れ物」とされている。この名称はマオリの詩やうたで使われる伝統的な表現二つを組み合わせたものである。実際に、1993年から2002年までテパパ館長を務めたサザラン（Cheryll Sotheran）によると「全てのニュージーランド人にとって親しみの持てる表現であって、ニュージーランドが居心地の良いまた形式張らない所だと感じてもらえるよう目指した」という（青柳2008）。

本節では設立経緯を追うことで、テパパがどの様に二文化主義を体現しているかに関して大枠を確認した。次節では、そうしたテパパが実際にはどの様に二文化主義と向き合っているのかをその運営方針と組織体系から考察していく。

---

<sup>24</sup> 例えば、“... the Museum expresses and recognises the mana and significance of Maori, European, and other major traditions and cultural heritages, ...” (Act 1992, p5)

### 4.3. 運営方針・組織体系

運営方針に触れる前に、まずテパパにおける二文化主義の考え方を述べる。テパパにおける二文化主義とは、マオリとパケハの協働であり、その法的、概念的、またワイタンギ条約にのっとりた枠組みのなかで、博物館が運営されるとしている。

Biculturalism at Te Papa is the partnership between Tangata Whenua and Tangata Tiriti<sup>25</sup> recognising the legislative, conceptual, and Treaty framework within which the Museum operates as well as reflecting international developments.

この考え方を前提として、以下ではテパパにおいて二文化主義が運営方針や組織形態にどう表れているか見ていく。二文化主義的協働はテパパの主要なコンセプトの一つであり、現在でもその理念は受け継がれている。例えば 2001 年から毎年出ている向こう 3 年間の中期経営計画では経営理念が記されており、いくつかの項目の一つに “Te Papa is bicultural (テパパは二文化主義である)” とある。詳しい説明文の内容は年によって若干の変化はあるものの、具体的にはマオリとパケハの文化的差異をともに評価し展示に反映するということが書かれており、現在でも国立博物館であるテパパでは二文化主義の体現という設立当初からの方針が保たれていることが分かる。こうした二文化主義の姿勢は、毎年出される年次報告書内の二文化主義の指針 (Bicultural Policy) にて述べられている。記されていることは主に三点ある。

- ① テパパは二文化主義の組織である
- ② テパパ理事会<sup>26</sup>はワイタンギ条約を重要視している
- ③ 理事会はマオリとパケハ双方の代表者からなるひとつの理事会による経営という原則を支持する

---

<sup>25</sup> Tangata Whenua は最初に土地を発見した権利を有する人々（マオリ）、Tangata Tiriti はワイタンギ条約にて土地の権利が保障されている人々（パケハ）を指す。一般的に用いられる Māori と Pakeha に対して、この二つはマオリが自身の権利を主張する際に用いられる。

<sup>26</sup> 正式名称は The Museum of New Zealand Te Papa Tongarewa Board

こうした委員会の方針は、テパパの組織体系にも反映されている。テパパでは経営責任者が二名並列されており、一方がパケハ（Chief Executive Officer）、もう一方がマオリ（Maori Co-leader）で構成されている。マオリ責任者は部族支援を含めた二文化主義的な視点からの運営を担っている。この様に、国立博物館テパパでは、二文化主義の体現を運営方針と組織体系の両面から実現しているのである。

#### 4.4. 事業内容

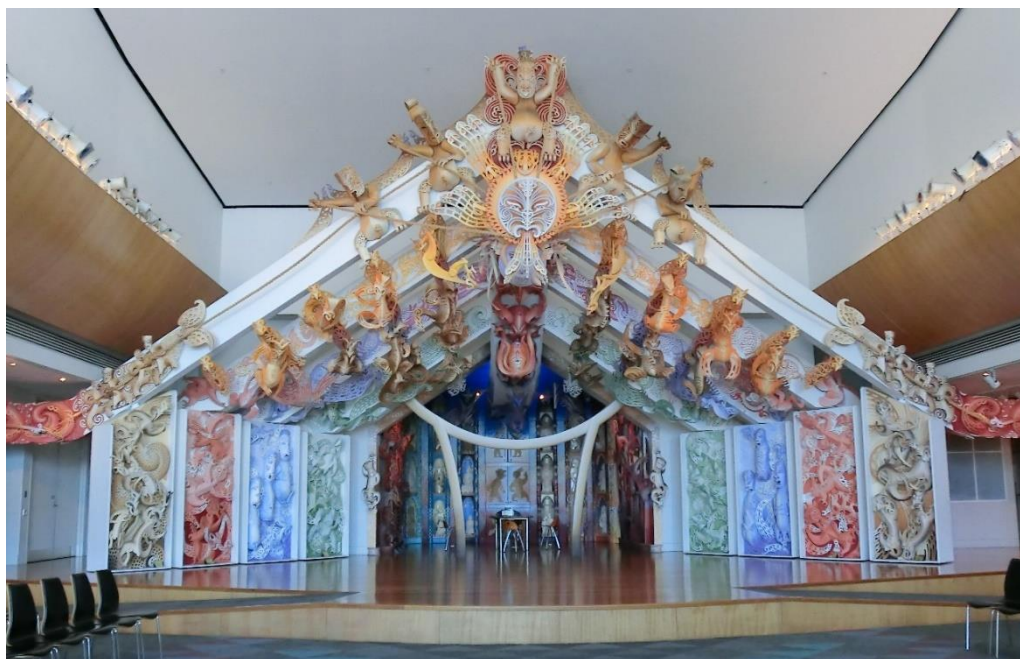
前節では、テパパの運営方針と組織体系にて二文化主義が反映されていることを確認した。そこで本節では、実際の事業にて目に見える形で二文化主義がどのように現れているのかを考察していく。

博物館の主要事業は展示活動であるため、第一に博物館の展示に関して見ていく。常設展示では展示スペースが3フロアに分かれている中で、1フロアがマオリ文化のために使われており、その他のフロアにてニュージーランドの全般的な歴史や自然について触れられている<sup>27</sup>。マオリ文化のフロアにて中核を成している展示がマラエ（Te Marae）である（図表6）。マラエはマオリ文化において、各部族・村にある祝祭場を指し、日常的な集会から冠婚葬祭等の非日常的儀礼、訪問者のもてなしにも使用される場で、マオリにとって重要な施設である。そのマラエをテパパでは「二文化主義的なパートナーシップの精神を体現している」とし、来場者にニュージーランド固有の文化を体験させる民族文化の交流場として位置付けている。完成当時の新聞記事では、テパパは「全てのニュージーランド人に帰属し、誰もが集うことの出来る施設であり、平和的共生を標榜したランドマークとしての存在」と紹介されており（宮里 2009）、二文化主義的アイデンティティの構築の一端を担っている。

---

<sup>27</sup> 所蔵品は①芸術品（Art）②歴史（History）③マオリ宝物（Taonga Maori）④太平洋文化（Pacific Cultures）⑤自然史（Natural History）の5分野に分けられている。

図表 6 . テパパの 4 階に設置されたマラエ（Te Marae）



筆者撮影（2011年8月5日）

また、視覚的に分かりやすく来場者に訴えかけるマラエ以外にも、同フロアにはマオリ世界の概観、部族 (iwi) の展示、子供用の説明スペース等が設けられている。その中で特徴的なのが、ワイタンギ条約に関する展示が独立している点である。テパパにて二文化主義の指針が語られる際に度々用いられるこの条約が、方針の基軸としてだけでなく二文化主義を社会に浸透させる上でも要となっていることが読み取れるであろう。また、数か月単位の短期展示も開催されており、その中にもマオリ文化を紹介するものが見受けられる。その一つの例として、2003年に開催されていた七つの短期展示の内、そのタイトルから二つがマオリにかかわるものと推測される<sup>28</sup>。以上のようにテパパの展示においては、マオリ文化に積極的に焦点が当てられていることが分かる。

さらにテパパでは、展示を通してニュージーランド社会にマオリ文化を発信しているだけでなく、マオリの部族集団 (iwi) に対しても支援を行っている。例えば、部族が自身の宝物を紹介できる機会を提供しており、これが先に述べた通りマオリ文化のフロアの一角を占めて

<sup>28</sup> “Ngā Toko Rima: Contemporary clayworks” マオリ人粘土作家の展示と “Te Awa Tupua: The Whanganui iwi” マオリ部族との協力展示の二つである。その他五つは、現代アートや欧州文化のもの、恐竜等である。

いる。各部族がテパパと協力して短期の展示を作り上げており、1998年から現在までその展示が途切れる事はない。また、マオリ先祖の遺骨返還にも携わっており、国内外問わず各部族が先祖の遺骨を取り戻せるよう調査・費用の支援も行われている。この様にテパパでは、宣言や方針に留まることなく目に見える形で二文化主義を体現しているのである。

また、博物館の主要な事業の一つに教育の場としての役割も挙げられる。この点に関しては、博物館と社会との関係性という観点から次節で詳しく述べていく。

#### 4.5. 社会との関係性

前節までで、テパパが如何に二文化主義を体現しているのか具体的な方針や事業を通して見てきた。本節では、そうした取り組みが何故ニュージーランド社会に二文化主義を広める要因となり得るのか考察する。テパパを通して二文化主義が浸透する要因は、その集客力と教育の場としての役割の二点にあると考える。

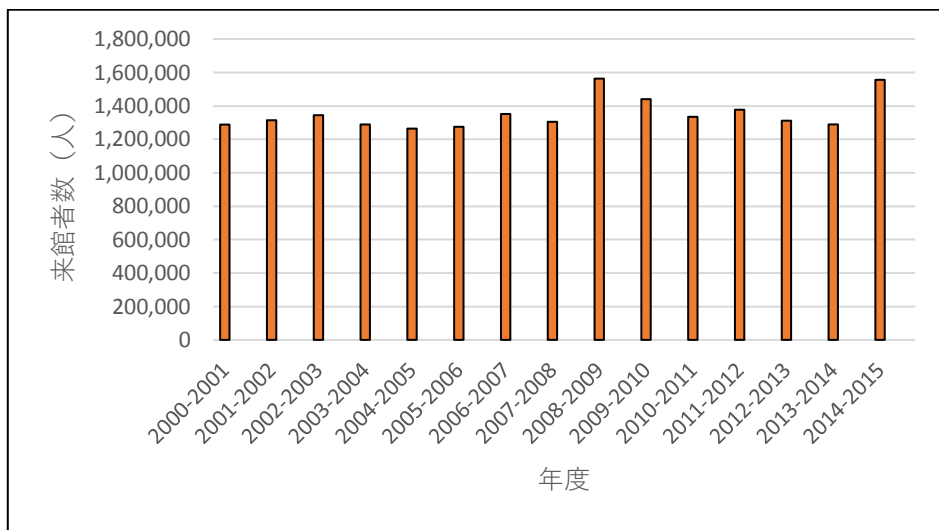
第一に集客力に関して、テパパは圧倒的である。1998年の開館以来、年間来館者数は常に100万人を超えている。（図表7）ニュージーランドにおいて年間の来館者が5000人以下の博物館が61%を占め、50万人以上が数える程しかない状況<sup>29</sup>を踏まえると、テパパの来館者が如何に多いか分かる。その内訳を見るとパケハが占める割合が一番多く、2000～2014年度の平均来館者の73%がパケハである。実際の人口比ではパケハが占める割合は66%であることから、パケハにテパパの展示を通して二文化主義に触れる機会が多く提供されていることが読み取れる。また、年齢別では16～24歳が人口比よりも多く来館している点から、若年層が多く来館していることが分かる。加えて、来館者のアンケート調査によると「満足した」「良かった」と回答する人が2000年代を通して95%前後で推移していることから、来館した人はテパパの展示を通して好意的な印象を受けていることが分かる。さらに、テパパのホームページ閲覧者数は統計を開始

---

<sup>29</sup> 増田（2009b）より、ニュージーランドの博物館に向けたアンケート調査を参考にした。アンケート結果は、テ・パパ・ナショナル・サービスのデータベースより抽出された620の博物館と関連する組織のうち、回答があった180の組織の回答を反映している。180のうち、年間来館者数が50万人を超える組織は4つであった。

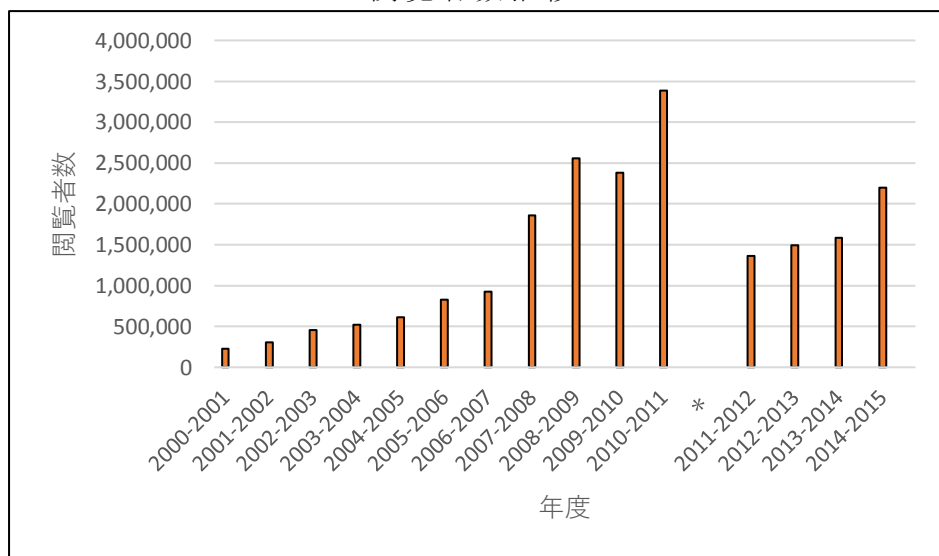
した 2000 年度から右肩上がりに伸びていることが分かる。（図表 8）この点から、テパパに興味を持つ人が増加傾向にあると分かる。以上の通り、テパパの集客力は強く、パケハを含め多くの人を魅了し続けているのである。

図表 7. テパパ来館者数推移



出典：テパパ Annual Report 各年より筆者作成

図表 8. テパパホームページ閲覧者数推移



（注）閲覧者数統計の取り方が 2011-2012 年度から変更されたため、\*以降はその変更を考慮した値を反映している。

出典：テパパ Annual Report 各年より筆者作成

第二に、教育の場としての役割に関して述べる。ニュージーランドにおいてテパパを含め博物館は教育の場の一つとして認識されている。本稿では博物館と教育との関係を生涯教育、学校教育の二つに分けて考察していく。教育においてマオリ文化を取り入れるという動きは、2章で触れたように1980年代の転換期から始まった。以下では、各教育において博物館がどのような位置づけにあるのか見ていく。

ニュージーランドにおいて生涯教育とは「休日は家族で講演に行きスポーツに励み、博物館、図書館で楽しみながら学ぶ」（市川 2005, p.99）というものを指す。生涯教育発足当初<sup>30</sup>は英国文化の浸透が中核に置かれており、博物館が生涯教育の場として注目され始めた第二次世界大戦後の1945年においても、博物館教育の目的は英国系文化と英語の普及であった。その転換点が先に述べた1980年代であり、現在では生涯教育の基本に多民族間の歴史的な摩擦の融和が置かれている（市川 2005）。ニュージーランド教育省の諮問機関である CLANZ（Community Learning Aotearoa New Zealand）<sup>31</sup>が掲げているニュージーランド生涯学習計画の主要目標の一つに、「博物館、図書館等における両親教育、文化財教育、異文化理解」（市川 2005）があり、博物館を通じたマオリ文化理解の推進政策が読み取れる。また、諮問機関の名称にマオリ語の「Aotearoa（白い雲の意味）」を用いる点からも、民族協調の国家姿勢が伺える。

次に、学校教育と博物館との関係について見ていく。先に述べた通り、博物館は生涯教育施設としてマオリ文化を積極的に取り上げている。こうした博物館での課外活動が、学校の単位として認定されるという点はニュージーランドの学校教育における一つの特徴であろう。実際、テパパの入館者のうち10～15%は学校関係者が占めているというデータもある（増田 2009a）。また、学校でのマオリ文化教育を促進させるべく、テパパのホームページには教員の指導をサポートするプログラム・情報が多く載せられている。具体的に3点を紹介する。第一に、生徒向けのテパパ見学ツアーである。このプログラムは幼少・小学・中高生と年齢別に組まれており、各学年ともテパパ全体の見学プログラムだけでなく、マオリ文化に限定したものも用意されている。館員から説明を受けながら学べる点が特徴である。そして第二に、館員でなく教員が展示品を説明しながら見学を進めるセルフガイドのサポートツールである。展示の説明や生徒に投げかける質

<sup>30</sup> 1915年ニュージーランド労働者教育協会（WEA）の結成と、成人教育運動の開始が始まりとされている（市川 2005より）

<sup>31</sup> 現在では Adult and Community Education Aotearoa（ace aotearoa）に改名

問とその回答例が記載されており、教員が円滑に展示品について伝えられる様な情報が挙げられている。最後に、教室内で行えるプログラムが用意されている点である。マオリに関する展示物の説明が写真と共に提供されていたり、職員とのビデオ会議を通して展示品を学べる機会もあったりする。この様にテパパに訪れなくとも、写真や説明文をもとに教員が正しい情報を簡単に学生に教えられる様になっている。以上三点の通り、テパパではインターネットを含めて学習支援が充実していることが分かる。教育の場として、テパパは生涯・学校どちらのアプローチからでもマオリ文化を広める取り組みをしている。

教育の場としてのテパパの姿勢は、入館前のオリエンテーションでも見られる。ヨーロッパ文化とは大きく異なる発音や演舞、習慣をもつマオリ文化に対して、偏見や誤解からマオリの人々が嘲笑の対象になることの無いようにマナーの徹底が行われている。この様に、テパパでは学習としての教育とともに社会・人権的な啓発も行われている。

テパパの圧倒的な集客力により二文化主義に触れる機会を拡大させるとともに、教育の場としての機能も果たし、次世代のマオリ文化理解を深めようと取り組んでいる。この二点から、テパパがニュージーランドにおいて二文化主義を浸透させる一つの主体になっていると言えるのである。

#### 4.6. 博物館の二文化主義を巡る論争

以上までで、テパパが如何に二文化主義を体現し、社会への普及に寄与しているかを考察してきた。しかし、国立博物館が二文化主義を掲げることに對しては批判的な意見もある。そこで本節では、テパパ開館前後でどのような議論があったのか見ていく。

まず、開館前に関してである。1990年、テパパの前身であるニュージーランド国立博物館の副館長ジェームズ・マック（James Mack）は、新博物館テパパについて「ヨーロッパというよりもマオリに重点を置いていきたい」と語っていた（青柳 2008）。この様なマオリを重視する姿勢への反応は、1992年11月開催の「プヒタンガの声（ニュージーランド・アオテアロアの社会史）」展覧会にて表面化する。同展覧会は新博物館の建設方針に従いマオリとパケハの学芸員が同数のチームによって企画され、自然史・植民史・マオリ文化・ヨーロッパ美術を扱うものであったが、酷評を受けた。主な批判はマオリに重点が置かれすぎている点であり、そうした意見が博物館の記帳や新聞記事に見られた。これに對して博物館側は、専

門家を採用しヨーロッパ歴史部門の強化を図る等の対応を取った。この事例から分かる様に、マオリ文化の重視がパケハ側にとっては好ましくないものとして見られがちであり、批判の対象になり得るのである。

この様な批判は、テパパ開館後にも見受けられる。開館初期には副館長マックの発言の通りパケハ史よりもマオリ史に焦点が当てられた。また、アミア（Amiria 2004）によると、マオリは侵略された側としてモラル的に高い位置に置かれた一方で、パケハは植民支配を実行した子孫として批判を受けるような立場に置かれた。そのような展示の在り方に対しては、懸念とともに、ヨーロッパの芸術品もマオリと同等にみなし扱って欲しいという多くの声がパケハを中心に挙げられたという。

また、青柳（2008）は次のようなマオリ側からの意見を紹介している。ミュンツ（Peter Munz）<sup>32</sup>は、マオリ文化の展示に対して、タラナキ大虐殺事件<sup>33</sup>に触れていない点を挙げ、歴史の歪曲であると批判した。しかし、博物館がこの事件を取り上げなかったのは、犠牲者と認識されることを嫌ったマオリ指導者の意見に配慮したためであった。

二文化主義を掲げるということは、抑圧されていたマイノリティを再評価することである一方、以前まで主要だと認知されていた民族・文化の扱い方を変えるということである。博物館の展示一つを取っても、展示品の取捨選択や見せ方によって来館者の感じ方は異なるため、デリケートな問題が起こることが分かる。こうした不安定な関係は次章の児童書を巡っても見受けられる。

本章では、国立博物館を通してニュージーランド社会にどのようにマオリ文化が取り上げられ、二文化主義が体现されているのか見てきた。国立博物館はその収入の50%以上を政府からの補助金で賄っており、政府の政策がより反映されやすいと考える。そこで次章では、どちらかということ自生的に発展していったニュージーランドにおける児童書を通して二文化主義の広がりを考察していく。

---

<sup>32</sup> 1921-2006、ドイツ人哲学者・歴史家、NZに移住

<sup>33</sup> 1835年にイギリス人がマオリ部族を虐殺した事件

## 5. 文化面の二文化主義：児童文学

本章では、児童文学を通してニュージーランドで社会文化的に二文化主義がどの様に体现されているのかを見る。政府の方針が直接、反映されやすい国立博物館とは異なり、児童文学では二文化主義の浸透する速度は遅いと考えられる。そうした状況の中で、マオリ文化への関心が自生的に高まったのか考察していく。はじめにニュージーランドにおける児童文学の展開を紹介し、児童文学賞を通して作品全体の傾向を確認した後で、個別の作品・著者について詳しく見ていく。そしてその中で、二文化主義を巡る葛藤について考察する。

### 5.1. ニュージーランドにおける児童文学の展開

本節では、ニュージーランドの児童文学においてマオリ文化が取り上げられる様になった経緯を見る。はじめにニュージーランド文学全体の潮流を述べた後に、児童文学の登場とマオリへの関心が高まるまでを追っていく。

ラクエル（Raquel 2004）によると、ニュージーランド文学の方向性は第二次世界大戦の前後で大きく変わる。ワイタング条約が締結された 1840 年頃から第二次大戦前までは、文学においてイギリスへの文化的帰属意識が強かった。また、マオリ文化が文字を持っていなかったこともあり、マオリに関する文学作品が少なかったと考えられる。しかし第二次世界大戦後、イギリスとの関係が変化するとその傾向は変わる。ニュージーランド人独自のアイデンティティの模索と、その手段の一つとしてマオリ文化への注目が集まるようになった。一方で、ニュージーランド社会においてマオリ作家の活躍が顕著になるのは 1980、90 年代以降である。このような変化は児童文学においても共通して見られる。本節ではより詳しくその経過を追っていく。

イギリス支配下に置かれる前の初期児童書は、ニュージーランドを訪れた訪問者によって書かれることが多かった（定松編 2003, p. 243）。その後イギリス領となった 1840 年以降は入植者の生活が扱われることが多く（桂・牟田編著 2004, p. 89）、児童書ではイギリス文化が中核をなしていた事がうかがえる。1910 年代頃からはニュージーランドの国民性を意識

した作品も生まれるようになる<sup>34</sup>。一方で、大半の作品はイギリスの出版社から刊行されるため手に入りづらく、また、登用される挿絵作家もイギリス人が多かったため（桂編著 2011）、ニュージーランドの子ども達には馴染みの薄いものであったと考えられる。1940年代以降にはニュージーランド人による質の高い挿絵が登場するも、その評判は芳しくなかった。例えば、ニュージーランドを代表する児童文学作家のマーガレット・マーヒー（1936 - 2012）は幼少期の頃を振り返り、「私が子供の頃、自国で生産されたりできたりしたものはどれも良くない、または本物ではないという哲学的感情が一般的」だったと述べている（加藤訳 1990, p. 20）。彼女は幼少期には、ニュージーランド生まれにも関わらず、イギリス人家庭で読まれる本しか読まなかったという（英国圏児童文学研究会編 2003, p. 241）。マーヒーはこの様な当時の矛盾を、講演会<sup>35</sup>にて他の小説家の本の前書きを引用して具体的に述べている（加藤訳 1990, p. 21）。

英語を話す子供達に読まれるクリスマスのお話の中の風景は、たいてい冬の、葉の落ちた雪景色でした。クリスマスの暖炉のまきも、ひいらぎの赤い実も、昔から大事にされてきた小道具でした。けれども、英語を話し、イギリス人の気質をもっている、南十字星の下で育ち、クリスマスのまきには意味がなく、雪も知らない世代の子供達がいるのです。<sup>36</sup>

この様な矛盾を抱えつつ、文学全体の潮流と同様、児童文学においても第二次世界大戦を経てニュージーランド独自のアイデンティティ模索とマオリ文化への注目がされる様になる（桂・牟田 2004, p. 207）。しかし、60、70年代を通して描かれた作品の多くは入植者の生活が中心となっていた（定松編 2003, p. 243）。その後、1980年代に児童書の国内出版が始まるとマオリが題材にされる作品も見られるようになる<sup>37</sup>。この時期は、2章でも述べてきた様にニュージーランド社会全体でマオリに関心が向くようになってきた頃であり、社会の動きが児童文学においても反映されつ

<sup>34</sup>一例として、エスター・グレン（Esther Glen）作の『六人のニュージーランドの子どもたち』（1917）が挙げられる。

<sup>35</sup> 1989年10月7日開催：オーストラリア・ニュージーランド文学会ワークショップ

<sup>36</sup> ケント・コマッシュ・クラーク作の『南十字星妖精物語』（1889）の前書きを引用したもの。

<sup>37</sup> 80年代に活躍したエルシー・ロックやJ・ウエストはヨーロッパ系でありながら、マオリとヨーロッパ人の出会いを描く作品を出している。

つある様子が伺える。ただし、こうした全体像とは別に、1900年代頃から1980年代にかけてもマオリ関連の児童書（マオリが題材にされた作品・マオリ系著者の作品）はごく少数ではあるものの見られた。（図表9）

図表9. マオリに関する児童書

年号	出来事	マオリ関連の児童書
1840	ワイタンギ条約締結	『多くのものごとの話』（1833, 著者不詳）  『NZのおとぎ話と伝説と南の海』（1892, エドワード・レットギア）
1914	第一次世界大戦勃発	
1945	第二次世界大戦終結 エスター・グレン賞設立	『おおい、君』（1962, ジェーン・ヒル） 『少年トゥリの物語』（1963, レスリー・パウエル） 『男の子とタニファ』（1966, ロン・ベイコン）
1975	ワイタンギ条約法施行	
1976	ラッセル・クラーク賞設立	『人々の家』（1977, ロン・ベイコン） 『タニウハ』（1984, ロビン・カフキワ）
1987	マオリ語の公用語化	
1995	テクラポウナム賞設立（マオリ人作家に授賞）	

以下の文献を参考に筆者作成  
（桂編著 2006、桂編著 2011、桂・牟田編著 2004、加藤 1990、定松編 2003、百々 1986）

近年には、こうしたマオリ関連の児童書が普及していく様子が、ニュージーランド国立図書館（National Library of New Zealand）の蔵書からも読み取れる。マオリに関する児童書 128 冊のうち、約 83% が 2000 年代以降出版されたものであった<sup>38</sup>。1980 年代以前は 3 冊、1980 年代は 7 冊、1990 年代は 13 冊と次第に増加しているものの、マオリ文化が本格的に題材とされ始めたのは、2000 年代以降と見られる<sup>39</sup>。全体的な作品の傾向として

<sup>38</sup> 国立図書館の蔵書の詳細検索にて、キーワード「picture books for children」「maori」、タイプ「book」、言語「English」として検索した結果である（2016年5月30日実施）。なお、具体的な作品の詳細に関しては付録を参照。

<sup>39</sup> ただし、同名の書籍で出版年が異なるものがあり、初版が1990年代以前の作品が含まれている可能性もある。

は、マオリ系の子どもたちがヨーロッパ系の子どもたちと変わらない日常生活を送る話や、ヨーロッパ系の子どもたちが偶然マオリ文化に触れる機会をもつ話が多い。この点は、次節で述べる文学賞の候補になる作品の物語の傾向とは少し異なるため、次節にて詳しく述べる。

本節では、ニュージーランドでの児童文学の発展過程と、マオリ文化の位置づけの変化を見てきた。その中で、例外は見られるものの児童文学全体の流れとしては、1980年代以降にマオリが題材とされる作品が増える傾向にあったことが分かった。そこで、次節では児童文学賞の候補者・作品に焦点を当てて、児童文学におけるマオリの扱われ方を考察していく。

## 5.2. 児童文学賞に見る作品の傾向

本節では、児童文学賞を通してニュージーランド社会でマオリ文化がどのように扱われてきたのかを見ていく。取り上げるのは、エスター・グレン児童文学賞（Esther Glen Junior Fiction Award）、ラッセル・クラーク賞（Russell Clark Award）、テ・クラ・ポウナム賞（Te Kura Pounamu）の三つの賞である<sup>40</sup>。

第一にエスター・グレン児童文学賞について見ていく。これは1945年に設立されたニュージーランド最古の児童文学賞で、児童文学の開拓者であるエスター・グレン（1881-1940）を記念して作られ、ニュージーランド児童文学に貢献した作品に与えられる。図表10に、1945年から2015年までの受賞候補者数とそれらの作品がマオリ文化と関わりを持っているのかをまとめている。そこから分かることは二点ある。一つは、児童文学全体を通して1980年代前半までは作品数が少なかったという点である。1988年以前は候補者がいない、もしくは一名のみなのに対して、それ以降はほぼ毎年候補者が選出され、その平均も4.6人と高い値を示している。この点から前節で述べた通り、1980年代以降にニュージーランドでは児童文学が本格化したことが読み取れる。そして、もう一つは、候補者数全体は増加しているものの、マオリ関連の作品が登場する割合は必ずしも増えていないという点である。1980年代以降、児童文学を含めて社会全体でマオリへの関心が高まる中で、候補者数全体に占めるマオリ関連作品の割合は、1987年以前は15人中3人と20%なのに対して1988年以降は129人

<sup>40</sup> この3つの賞が現時点では主要なものであり、その他にノンフィクション作品に与えられるエルシー・ロック賞（Elsie Locke Award, 1987）もある。

中 8 人で 6.2%とむしろ減少していることが分かる。この点に関しては、次に見るラッセル・クラーク賞から読み取れることを踏まえて考察する。

第二にラッセル・クラーク賞について見ていく。これは 1976 年に設立され、1978 年から授賞が始まった。ニュージーランドの挿絵画家ラッセル・クラーク（1905－1966）を記念して作られたため、優れた挿絵画家に贈られる賞となっている。図表 10 の受賞候補者数と作品の特徴から、エステル・グレン児童文学賞と異なり、マオリ関連作品の候補数が多いことが読み取れる。1978 年から 2015 年のマオリ関連作品の占める割合は、エステル・グレン児童文学賞が 5.9%(136 人中 8 人)なのに対して、ラッセル・クラーク賞は約 21%（135 人中 29 人）と 3 倍以上となっている。

こうした現状から考えられることが二点ある。一つが、マオリ関連作品に対する見方が、「読むための文学作品」というより「描かれる絵を楽しむ絵本」となっている点である。著者が受賞するエステル・グレン賞よりも挿絵画家が受賞するラッセル・クラーク賞の候補作品にマオリ関連が多いのは、マオリ関連の作品はその物語性が評価されることが少ないからだと思われる。この点に関して、児童文学全体としてはパケハ関連の作品とマオリ関連の作品が同じように扱われておらず、前章で述べた博物館の展示ほどは二文化主義が浸透していないと言える。

そしてもう一つが、エステル・グレン賞、ラッセル・クラーク賞ともに 1980 年代以降マオリ関連作品が登場する割合が小さくなっており、マオリ関連作品への関心が薄まっているように感じられる点である。1980 年代以降児童書全体の出版数が増加する中でマオリの存在感が相対的に下がるのは分かるものの、この減少具合は明らかに大きい。その要因の一つに、マオリ語で書かれた児童書へ贈られる賞設立があると考えられるため、後述する。また、もう一つの要因として、1980 年代以前はニュージーランドの児童書を普及させるためにマオリ文化が一つのキーワードとして注目されていたという点が挙げられる。従来はイギリス系の児童書がニュージーランド国内の大半を占める中で、児童文学においてニュージーランドの独自性を表すためにマオリ文化が利用されていたのではないだろうか。1980 年代以降国内出版も始まり、ニュージーランド産の児童文学が確立する中で、マオリ文化はその役目を終えたものとして扱われているとも考えられる。

図表10. エスター・グレン賞、ラッセル・クラーク賞におけるマオリ関連作品（各賞ホームページより筆者作成）

	エスター・グレン賞						エスター・グレン賞						ラッセル・クラーク賞				
	候補者数	マオリ関連	著者	内容	言語		候補者数	マオリ関連	著者	内容	言語		候補者数	マオリ関連	著者/画家	内容	言語
1945	1	1		✓		1978	1					1978	1				
1946						1979	1					1979	1				
1947	1	1		✓		1980						1980					
1948						1981						1981					
1949						1982	1					1982	2	2	✓	✓	
1950	1					1983	1					1983					
1951						1984	1					1984	2				
1952						1985	1					1985	1				
1953						1986	1					1986	1				
1954						1987						1987	1	1		✓	
1955						1988	5	1	✓			1988	7	2	✓	✓	
1956						1989	5					1989	4	1	✓	✓	
1957						1990	5					1990	3			✓	
1958						1991	4	1	✓	✓	✓	1991	5	2	✓✓	✓✓	
1959	1					1992	4					1992	4			✓	
1960						1993	4					1993	3				
1961						1994	5					1994	5	1	✓	✓	
1962						1995	5					1995	4	1		✓	
1963						1996	5					1996	4				
1964	1	1		✓		1997	5					1997	5	1	✓	✓	
1965						1998	5	1		✓		1998	6	1	✓		
1966						1999						1999					
1967						2000						2000					
1968						2001	4					2001	5	1	✓		
1969						2002	4	1			✓	2002	4				
1970	1					2003	5					2003	5				
1971						2004	5	1		✓		2004	5	2	✓✓	✓	
1972						2005	6	1		✓		2005	5	3	✓✓✓	✓	
1973	1					2006	5					2006	5	3	✓✓	✓	
1974						2007	6					2007	5	1	✓	✓	
1975	1					2008	6					2008	5	2	✓	✓	
1976						2009	5					2009	5				
1977						2010	5					2010	5	1	✓		
(1945-1977小計)	8	3		3		2011	5	1		✓		2011	5				
候補者数(各年度の全候補者の数) マオリ関連(著者・内容・言語のいずれかでマオリと関連している作品数) 著者(著者または画家がマオリ系の場合✓を付ける) 内容(作品のストーリーがマオリに関連している場合✓を付ける) 言語(マオリ語でも出版されている場合に✓を付ける)						2012	5					2012	6	2	✓	✓	
						2013	6					2013	6				
						2014	5					2014	5	2	✓✓	✓	
						2015	5	1		✓		2015	5				
						(1978-2015小計)	128	8	2	6	2	RC合計	135	29	22	14	5
						EG合計	136	11	2	9	2						

第三に、テ・クラ・ポウナム賞について見ていく。これはマオリ語で書かれた児童書に与えられる賞で、1995年設立、96年から授賞が始まった。英語の読める子どもたちを読者の対象としていたエスター・グレン賞、ラッセル・クラーク賞とは異なり、マオリ系の子どもたちやマオリ語の読めるヨーロッパ系の子どもたちを対象としている点から、マオリ系の読者に向けた作品への関心も高まってきたのが伺える。候補者数は毎年平均で4人挙げられており、規模においてはその他の賞と大差がない。（図表11）

図表11. テ・クラ・ポウナム賞の候補者数

	テクラポウナム賞
	候補者数
1996	5
1997	5
1998	3
1999	
2000	
2001	3
2002	3
2003	5
2004	5
2005	5
2006	
2007	5
2008	5
2009	5
2010	5
2011	6
2012	5
2013	5
2014	5
2015	5
合計	80

テ・クラ・ポウナム賞ホームページより筆者作成

先に述べたエスター・グレン賞、ラッセル・クラーク賞におけるマオリ関連作品の候補者割合の低下は、こうしたマオリ作品に特化した児童文学賞の出現も一つの要因になっていると考えられる。マオリ文化が強く表れている作品に焦点を当てた賞を設立し、そこで定期的に作品を取り上げることで、あえて他の賞にてマオリ関連作品に注目しなくなったのではないだろうか。この様に、児童文学賞では前章の博物館の体制と比較すると、二文化主義の潮流が強くは反映されていない。ただし、長期的に見れば文学賞候補には多数のマオリ関連作品が選出されていたり、マオリ文学のための新たな賞も創設されたりしている。こうした点からは、児童文学においても二文化主義の体現がなされていると考えられ

る。

本節では児童文学賞における作品・著者の傾向を見てきた。その中には度々名前の挙がる作家が二人いる。一人はマーガレット・マーヒー（Margaret Mahy：1936-2012）で、彼女はエスター・グレン賞に計 12 回<sup>41</sup>、ラッセル・クラーク賞に計 2 回候補者として選出されている。マーヒーはニュージーランドを代表するファンタジー児童書作家であり、数多く選出されていることからその評価が高いことがうかがえる。そしてもう一人が、ガビン・ビショップ（Gavin Bishop：1946-）である。エスター・グレン賞では一度候補に挙げただけだが、ラッセル・クラーク賞では計 16 回候補に選ばれており<sup>42</sup>、そのうち 2006 年度は彼が挿絵を描いた作品が二点ノミネートされた。ビショップについては後の節にて詳しく述べていく。

前節でも述べた様に、国立図書館に収められている児童書と文学賞の候補になるものでは扱われる題材の傾向が異なる。国立図書館に置かれている作品は、マオリ系の子どもたちがヨーロッパ系の子どもたちと変わらない現代的な日常生活を送る話や、ヨーロッパ系の子どもたちが偶然マオリ文化に触れる機会をもつ話が多く見受けられる。一方で、文学賞に見受けられるのは、伝統的なマオリ族を題材にしている作品や、マオリの伝説をもとにしている作品が多い。こうしたストーリー傾向の違いは、子ども達に日常的に親しまれる作品と児童文学として評価される作品が必ずしも一致しているわけではないことを表す。マオリ文化ならびに二文化主義を広めるためには、マオリ関連の作品であってもニュージーランド社会により親しまれやすいものを文学賞で取り上げて評価することが一つの有効な手段だと考えられる。しかし、文学賞では作品のストーリーによって優遇し評価を高めるのは公正とは言えない。この点が児童文学賞において二文化主義を社会に浸透させることの障壁となっているのではないだろうか。

これまでは児童文学の全体を経緯や文学賞を通して考察してきた。そこで、次節以降は個別の作品・著者に焦点を当てることで、マオリ文化と二文化主義がどのように反映されているのかを見ていく。

### 5.3. マオリを題材とした児童書

本節では、マオリが題材にされた絵本に注目していく。桂（2011）によると、

<sup>41</sup> そのうち 6 回は受賞している（1970、1973、1983、1985、1993、2001 年度）

<sup>42</sup> そのうち 4 回は受賞している。（1982、2006、2008、2010 年度）

ニュージーランドでマオリ系画家によって描かれたマオリ神話やマオリ文化を題材とした児童書は 1960 年代から顕著に見られるようになってきたという。19 世紀後半に美術学校が設立され、そこで学んだ画家達が児童書の挿絵を担当するようになったのが 1940 年代以降であり、この流れに少し遅れてマオリ系画家からも活躍するようになった。

その中で特徴的な作品が、1966 年に作られた『男の子とタニファ』（*The Boy and the Taniwha*）である。マオリ文化を題材にしたこの作品は、ロン・ベイコン（Ron Bacon：1924–2005）によって文章が書かれ、マオリ系アーティストであるパラ・マチット（Para Matchitt：1933–）によって挿絵が描かれた。ベイコンはオーストラリア出身で幼少期にニュージーランドに移住したパケハである。田舎の学校で教員をしていた際に、マオリの子供たちが自身の文化に関心もてる様な児童書がないことを案じて本作品の執筆を始める。そこで、マオリを題材にするにあたっては挿絵もマオリ画家が描くべきだと考え、マチットに依頼することになった。マチットはマオリの高校を卒業し、師範学校にて美術と工芸を学ぶ。本作品の依頼をされる頃には抽象画家として名前が挙がるようになっていた。また、マオリ文化や歴史を題材とする彫刻作品も扱うことが多かったため、マオリの伝統を受け継ぐ彫刻家としても知られていた。

この作品では、マオリの伝統的な集落に暮らす少年ヘミ（Hemi）が中心となり話が進んでいく。ヘミは祖母からマオリの文化や伝統的生活を学ぶ中で、大人になるまで近づいてはいけないと言われているタニファ（Taniwha）<sup>43</sup>に興味を抱く。そこで祖母に頼みタニファのいる洞窟へと連れて行ってもらうという展開になっている。本作品の一つの特徴は、本文中にマオリ語の単語がいくつも使われている点である。マオリ語の名詞のすぐ後に同じ意味の英単語が置かれることで、その言葉が何を意味するのか自然と分かる様になっている。こうしたマオリ語は、とりわけタニファについて書かれている場面に登場する。この点から、マオリの文化・伝説であることを強調するためにマオリ語を効果的に用いていることが分かる。

The Taniwha, with his legs with claws like Kahu the hawk, his tail long curved like Moko the lizard, his body black like Po the night, his mouth wide open like Tuatini the shark…<sup>44</sup>

（下線部がマオリ語）

<sup>43</sup> マオリの伝説上の生き物で、水の守り神のことを指す。自身のテリトリー内の人々を守る一方で、ときには人々に悪い影響を与えることもあるとされている。

<sup>44</sup> 桂（2011）p. 169 より引用。

『男の子とタニファ』はニュージーランド児童文学史上、記念碑的な作品とされている。その理由は、ワイタンギ条約の理念にある一つの国に二つの民族・文化の共存という事を時代に先駆けて児童文学という媒体を通して実現したからだ（桂編著 2011, p. 169）。この作品の出版年は二文化主義の浸透を見る上で重要だと考える。なぜなら作品が出版された 1966 年は、ニュージーランド社会全体ではまだマオリ文化への関心がそれ程高まっていない頃だからである。ワイタンギ条約の再評価が公式に示されたのは 70 年代に入ってからであり、そうした時代背景の中で一部では二文化主義を体現する作品が生まれているのは特筆すべきであろう。また、著者ベイコンはマオリの子どもたちのために本作品を書いたが、マオリ語と英語が併用されることでパケハの子どもたちにとっても読みやすい作品となっている。この様な読者の文化的背景に関わらず親しめる点からも、『男の子とタニファ』が二文化主義を体現していると言えるだろう。

#### 5.4. マオリとパケハの血を引く児童書作家

前節では、一つの作品に注目して二文化主義を考察してきた。次いで本節では、マオリとパケハの両方の文化的背景を持つ一人の児童書作家を見ていく。ここで取り上げるのは、ニュージーランドを代表する絵本作家のガビン・ビショップである。児童文学賞候補に度々選出されているビショップは、マオリの血を引いておりマオリの神話や伝説を題材にした作品を多く手掛けていることから、桂（2011）では「2つの文化の融合を追及する絵本作家」として紹介されている。そこで本節でははじめに彼の生い立ちを紹介した後、彼が書いた三つの作品を通して二文化主義がどの様に表れているのか考察していく。

ビショップはイギリス人の父親とイギリスとマオリの混血の母親のもとに生まれた。一般の学校に通う中でパケハの観点から歴史を学び、マオリが問題を引き起こすものとして扱われていたため、当時は自身の二重の文化的背景に苦しんだ。しかし 1980 年代の母親の死を切掛けにマオリの系図をたどる旅に出ると、それ以降マオリ系の家族ともかかわりを持つようになる。こうしたマオリとパケハの両背景をもつ自身の経験から、ビショップは二文化主義に関連する作品を手掛けるようになった（サワダ 2006, pp. 46-47）。そこで、ビショップが書いたマオリに関連した作品を三つ挙げる。

一つは、1993 年に出版された『ヒネポ』（Hinepau）である。桂（2006）によると、この物語はビショップの先祖の伝説に基づいた創作で、ヒネポは彼の母親の何百年も続く歴史ある名字だという。少女ヒネポがかつて追い出された村の

人々を自身の命を懸けて救うというもので、マオリ文化に関連した内容ではあるものの、ストーリー自体が二文化主義を表しているわけではない。しかし、英語で書かれた本文の中にマオリの言葉がいくつも編み込まれており、その英語訳が脚注に紹介されている。この背景にはマオリの伝説を通してその文化を伝える際に、言語も異なるということを示す意図があり、複数の文化が共生している社会での優れたテキストとなっている（桂編著 2006, p. 259）。

二つめは、2005年に出版された『キーウィ・ムーン』（Kiwi Moon）である。物語の主人公はニュージーランドに生息する飛べない鳥で、仲間に馴染めず旅に出た先でマオリの部族間の争いやイギリス軍の行進に遭遇したり、その中で植民者の子どもを助ける場面があったりと、ニュージーランドの歴史が重ねられている（桂 2011, p. 248）。マオリを含めたニュージーランド社会の歴史をキーウィの視点を通して見るができるため、マオリ・パケハ関係なくその歴史に親しみがもちやすい作りになっていると考えられる。この作品は2006年度にラッセル・クラーク賞を受賞しており、その評価の高さがうかがえる。

そして最後は、1999年に出版された『ジャックが建てた家』（The House that Jack Built）である。この作品はニュージーランドが植民地化された19世紀が舞台となっており、マオリとパケハの対立がマオリ側の視点から描かれている。本作品は2000年に文学賞を受賞<sup>45</sup>しており評価が高い一方で、作品における二文化の在り方に対しての意見は分かれる。サワダ（2006）によると、クレア・ブラッドフォードは本作品が二文化間の争いを予告し、共通のアイデンティティをもつ可能性を拒んでいると主張する。一方で、二文化の背景をもつビショップがこうした作品を描くことで内容が受け入れられると主張する者もいる。『ジャックが建てた家』は、内容はマオリ側から描かれているが絵の表現はヨーロッパ系のものが用いられている。ビショップ自身は、こうした複層的な描き方が批判につながる可能性があることを認識していた。しかし、こうした表現によってマオリとパケハが共生する新しい世界を描き、民族に関係なく全てのニュージーランド人に自身のアイデンティティを意識してもらえることを望んだとサワダ（2006）は解釈する。この様にマオリが題材にされた作品は、マオリ文化を広める上では重要な役割を担う一方で、その内容は文化的背景の異なる読み手にとっては批判的に受け取られることもあるのである。

本章では考察してきたことは以下の三つの側面に分類できる。第一に、マオリ関連作品の制作という側面だ。これには児童文学が展開した経緯や個別の作品の考察が含まれる。2章で述べた二文化主義の潮流に呼応するように、マオリ文

<sup>45</sup> New Zealand Post Book Awards for Children and Young Adults 受賞。

化は作家の関心を集めマオリ関連作品は次第に出版されるようになった。そして第二に、そうしたマオリ関連作品の専門家による評価という側面である。これには児童文学賞が当てはまる。マオリ関連作品がパケハ関連作品に圧迫されることなく注目を集めている様子が伺える。この二点においては、児童文学で二文化主義が体现されていると言える。ただし、第三の文学作品の読み手による受容という側面からは、異なる傾向が見られた。ビショップの『ジャックが建てた家』を巡る読み手の評価から、読み手がマオリ関連作品をどの様に受容するかが重要であり、その仕方次第で作品が批判の対象になり得ることが分かった。文学作品においては往々にして複数の解釈が生じる。本作品の様なパケハとマオリの歴史的関係を扱う主題の場合、文化的背景や価値観の違いから論争につながりやすい。この様な受け取り方の違いは、2章で触れた二文化主義や4章で挙げた博物館を巡る論争にも関係している点だ。故に、二文化主義を社会に体现させるためには、二文化主義を受け取る側とのバランスが重要になってくるのである。

## 6. 結論

ニュージーランドにおける先住民族の地位が高いという印象から、本研究ではその背景にある政府が掲げる二文化主義に注目した。ニュージーランドにおける二文化主義とは先住民族マオリとヨーロッパ系のパケハの対等な関係性を指している。こうした二文化主義がどのようなものであるか確認するとともに、社会生活の中でどう表れているのか探った。具体的には、3章にて社会経済的な側面から、4、5章にて社会文化的な側面から考察した。以上の考察から、ニュージーランドにおける二文化主義は社会文化的には体現されつつある一方で、社会経済的には不十分であると結論付ける。

2章では、批判や課題がありつつもニュージーランドで二文化主義が展開してきた過程を確認した。イギリスマオリ間での1840年ワイタンギ条約締結を契機にイギリスによる植民地化が進行する。ワイタンギ条約には矛盾があったが、マオリ側の地道な抵抗運動や世界情勢の変化によって再評価され、1980年代からは二文化主義が本格化した。この潮流は、後の章で扱った国立博物館や児童文学における二文化主義の展開にも共通している。マオリに特化した配慮に対するパケハの不平等感や多民族化への対応等で課題は残るものの、これらの点からニュージーランドにおいて二文化主義が政策的に成果を挙げていると言える。

3章ではマオリパケハ間の収入格差を考察した。その中で、格差の背景に二つの要因があることが分かった。一つが雇用関係や就労産業に見られる就労状況の格差。もう一つが、収入構成から見られる保有資産の格差である。これらの点から、社会経済的には二文化主義が体現されていないと言える。

次の二つの章では、二文化主義の社会文化的な体現を考察すべく、4章で国立博物館、5章で児童文学を取り上げた。まず4章の国立博物館についてである。1980年代の二文化主義の潮流を汲んで設立された国立博物館テパパは、当初から二文化主義を経営理念に掲げており、その姿勢を組織運営や事業を通して体現している。その集客力や子どもへの教育機会の提供から社会への影響は大きいものと考えられる。2章でも挙げたパケハの不平等感という課題は残るものの、政策的影響を受けやすい国立博物館では二文化主義が体現されていると言える。

次に5章の児童文学についてである。ここでは児童文学の制作、評価、受容の三つの側面から考察した。制作では1980年代以降にマオリ関連作品が増えてきた点から、二文化主義の展開と共通した変化が見られた。また、評価の面でも多くの作品が取り上げられていたり、マオリ関連作品に特化した賞が創設された

りした点から、二文化主義への流れが見えた。ただし児童文学賞の候補作品には内容の偏りやマオリ関連作品の近年での注目頻度の低下も見られる。その点が政策の影響を受けづらいという国立博物館との違いを反映しているとも考えられる。一方で、作品の読み手に当たる受容面では、異なる解釈が二文化主義の論争を引き起こす例も見られた。

これら二つの章での分析から、国立博物館、児童文学ともに課題はありつつも全体的な潮流としては二文化主義が体現されていることが分かった。よって、ニュージーランドでは二文化主義が社会文化的に実践されていると言える。

以上の点から、本稿ではニュージーランドにおける二文化主義は社会文化的には体現されている一方で、経済的には不十分であると結論付ける。この文化面と経済面の差には二つの背景があると考ええる。

一つは、二文化主義を受け取るパケハの心理的要因である。この心理的要因とはパケハにとってマオリが資源競合的になることへの恐れや不満を指す。2章4節で取り上げたシブレイとリュウ（Sibley and Liu 2004）の調査にあったように、パケハは原則としての二文化主義には賛同する一方で、資源配分の問題となると難色を示す。文化面での二文化主義は自身もつ資源が目に見えて減ることはあまりない。しかし、収入や雇用といった経済面では二文化主義的な政策が実現されることでマオリ－パケハ間の競合関係が顕著に表れることになる。この点から、社会文化面に比べて社会経済面では二文化主義の体現が進んでいないのではないだろうか。

そしてもう一つが、政府の公的な文書にマオリ－パケハ間の経済的平等を目指す旨が明記されていないという点である。二文化主義的な政策として掲げられるものの多くは土地の返還や言語、教育等における文化復興であり、経済的な政策はあまり見られない。こうした政府の姿勢も、文化面と経済面で二文化主義の体現に関して差が生じた要因だと考えられる。

土地の返還や文化の復興はマオリ部族全体に関係する権利であり、ワイタンギ条約締結以降はそうした集団としてのマオリの地位向上が重要であった。しかし、パケハとの混血やマオリの都市化が進む現在では、都市に住むマオリの経済的な不平等がより大きな課題である。たまたし、積極的な経済政策は先に述べたパケハの心理的要因にもとづく抵抗が生じることは必至であろう。また、移民の人口が増加している近年では、マオリとパケハ以外の民族にも焦点を当てた多文化主義との関係にも注意を払う必要がある。一見ニュージーランドでは二文化主義が掲げられ、マオリとパケハの協調が実現されているかのように見える。しかし、その背景にはマオリとパケハ、及びその他の民族との間で常に緊張関係がくすぶっているのである。

本論文では、現地調査をしていない点や、考察に間接的なデータしか用いてい

ないといった点に課題があり、ニュージーランドにおける二文化主義を評価する上では限界がある。今後は、マオリに関する政策に対してのパケハ側の態度を探る必要がある。マオリ政策に関してどこからが受け入れられず、またその理由が何であるかを分析することで、それに応じた二文化主義の在り方や進め方の道筋が見えてくると考える。

## 参考文献一覧

### [書籍・論文]

- 青柳清孝（2008）「テ・パパ・トンガレワ：二文化主義の理想と現実」『ニュージーランド研究』第15巻 pp. 37-51
- 青柳まちこ（1997）『もっと知りたいニュージーランド』弘文堂
- 英語圏児童文学研究会編（2003）『英語圏の新しい児童文学』彩流社
- 原田敏治（2005）「ニュージーランドにおける二文化主義の背景」『東海大学紀要：文学部』第83輯 pp. 142-154
- Henare, Amiria. (2004) Te Papa Tongarewa the Museum of New Zealand. *International Journal of Social and Culture Practice*, 48, 55-63
- Hill, Raquel. (2004) “A Little Land With No History” -Pakeha Identity in Aotearoa New Zealand-. 『神奈川大学人文学会誌』No. 154 pp. 113-144
- 平松紘、申恵丰、マクリン・ジェラルド・ポール（MacAlinn, Gerald Paul）（2000）『世界人権問題叢書 36—ニュージーランド先住民マオリの人権と文化』明石書店
- 市川昌（2005）「ニュージーランドの博物館とマオリ文化—多民族社会と規制緩和のコミュニケーション活動—」『日本生涯教育学会論集』第26号 pp. 99-108
- 石原敏秀（2004）「ニュージーランドの教育制度—初等、中等学校を中心として—」『岐阜聖徳学園大学紀要〈教育学部編〉』第43集 pp. 1-9
- 加藤めぐみ訳（1990）「マーガレットマーヒーさん講演・ストーリーテリング」『南半球評論』第6号 pp. 19-28
- 桂宥子編著（2006）『シリーズ・文学ガイド⑩たのしく読める英米の絵本』ミネルヴァ書房
- （2011）『シリーズ・はじめて学ぶ文学史⑧はじめて学ぶ英米絵本史』ミネルヴァ書房
- 桂宥子、牟田おりえ編著（2004）『シリーズ・はじめて学ぶ文学史⑥はじめて学ぶ英米絵本史』ミネルヴァ書房
- 小杉世（2001）「ニュージーランドにおけるポストコロニアル主体形成—アルファベットの外縁を求めて—」『カルチュラル・スタディーズの理論と実践 II — ポストコロニアルとグローバリゼーション —』 pp. 73-86
- Marriott, Lisa and Sim, Dalice. (2015) Indicators of Inequality for Māori and Pacific People. *Journal of New Zealand Studies*, 20, pp. 24-50
- 増田辰良（2009a）「博物館への入館料金をめぐる論争」『北星学園大学経済学部

- 北星論集』第 48 巻第 2 号 pp. 61-96  
——— (2009b) 「博物館の企業化活動について」『北星学園大学経済学部北星論集』第 49 巻第 1 号 pp. 59-91
- 宮里孝生 (2009) 「フィールドノート 共生のシンボル?—ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワにおけるマラエ造形の解釈」『共生の文化研究』2 号 pp. 144-148
- 百々佑利子 (1986) 「オーストラリア・ニュージーランドの児童文学の現在」『日本児童文学』第 32 巻第 2 号 pp. 26-32
- 武者根理子 (1991) 「民族と国家の相克—「二民族—国家」ニュージーランドの行方—」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学』第 33 号 pp. 35-43
- 内藤暁子 (2000) 「未来への指針—再評価されたワイタンギ条約とマオリの戦略」『国立民族学博物館研究報告：別冊』21 号 pp. 329-346
- (2008) 「<土地の人>と<条約の人>—ニュージーランド「国民」形成におけるワイタンギ条約の意義—」『文化人類学』73 巻 3 号 pp. 380-399
- 岡崎享恭 (2015) 「テ・アタアランギとマオリ誤復興」『渾沌：近畿大学大学院総合文化研究科紀要』第 12 号 pp. 48-65
- 定松正編 (2003) 『イギリス・アメリカ児童文学ガイド』荒地出版社
- Sawada, Hannah Joy. (2006) *The House That Jack Built: Projecting a Future of Inevitable Conflict or Revisioning the Past as a Prerequisite to Peace?* 『日本ニュージーランド学会誌』第 13 巻 pp. 45-55
- Sibley, G Chris and Liu, H James. (2004) Attitudes towards biculturalism in New Zealand: Social dominance and Pakeha attitudes towards the general principles and resource-specific aspects of bicultural policy. *New Zealand Journal of Psychology*, 33, 2, 88-99.
- 杉原利治、大藪千穂 (2005) 「マオリ教育の新しい潮流—持続可能な社会と教育—」『岐阜大学教育学部研究報告：人文科学』第 53 巻第 2 号 pp. 97-117
- 矢部明宏 (2003) 「ニュージーランドの憲法事情」『諸外国の憲法事情』3 pp. 134-162
- 安川昱 (2003) 『南太平洋の英語文学の研究』（関西大学出版部）

[Web ページ]

- A Strategy for the Museum Sector in New Zealand. (2005) Museums Aotearoa ([http://www.museumsaotearoa.org.nz/sites/default/files/strategy\\_1.pdf](http://www.museumsaotearoa.org.nz/sites/default/files/strategy_1.pdf). 2016 年 12 月 20 日最終確認)
- Act 1992. Museum of New Zealand of Te Papa Tongarewa

- ([https://www.tepapa.govt.nz/sites/default/files/museum\\_of\\_new\\_zealand\\_te\\_papa\\_tongarewa\\_act\\_1992.pdf](https://www.tepapa.govt.nz/sites/default/files/museum_of_new_zealand_te_papa_tongarewa_act_1992.pdf). 2016年12月20日最終確認)
- Annual Report. Museum of New Zealand of Te Papa Tongarewa (<https://www.tepapa.govt.nz/about/what-we-do/annual-reports-and-key-documents>. 2016年12月20日最終確認) 2000－2014年度の各年を参照
- LIANZA Esther Glen Junior Fiction Award. Christchurch City Libraries (<http://my.christchurchcitylibraries.com/esther-glen-award/>. 2016年12月6日最終確認)
- LIANZA Russell Clark Award. Christchurch City Libraries (<http://my.christchurchcitylibraries.com/russell-clark-award/>. 2016年12月6日最終確認)
- LIANZA Te Kura Pounamu. Christchurch City Libraries (<http://my.christchurchcitylibraries.com/lianza-te-kura-pounamu/>. 2016年12月6日最終確認)
- Museums Aotearoa. Museums Aotearoa (<http://www.museumsaotearoa.org.nz/>. 2016年12月1日最終確認)
- National Education Goals. Ministry of Education (<http://www.education.govt.nz/ministry-of-education/legislation/negs/>. 2016年12月29日最終確認)
- National Library of New Zealand. National Library of New Zealand (<https://natlib.govt.nz/>. 2016年12月6日最終確認)
- New Zealand Book Award for Children & Young Adult. New Zealand Book Awards Trust (<http://www.nzbookawards.nz/new-zealand-book-awards-for-children-and-young-adults/>. 2016年12月11日最終確認)
- The Writers Files. New Zealand Book Council (<http://www.bookcouncil.org.nz/Writers/Information/Introduction.htm>. 2016年12月11日最終確認)
- Penguin Books New Zealand. A Penguin Random House Company (<http://penguin.co.nz/authors>、2016年11月27日最終確認)
- Statement of Intent. Museum of New Zealand of Te Papa Tongarewa (<https://www.tepapa.govt.nz/about/what-we-do/annual-reports-and-key-documents>. 2016年12月20日最終確認) 2001－2003、2004－2006、2007－2009、2010－2012、2014－2018を参照
- Story: Biculturalism. The Encyclopedia of New Zealand (<http://www.teara.govt.nz/en/biculturalism>、2016年12月22日最終確認)
- Te Aka Online Māori Dictionary. John C Moorfield (<http://maoridictionary.co.nz/>. 2016

年 12 月 6 日最終確認)

TE PAPA OUR PLACE. Museum of New Zealand of Te Papa Tongarewa  
(<https://www.tepapa.govt.nz/>. 2016 年 11 月 3 日最終確認)

2013 Census ethnic group profiles. Statistics New Zealand  
(<http://www.stats.govt.nz/Census/2013-census/profile-and-summary-reports/ethnic-profiles.aspx>. 2017 年 1 月 4 日最終確認) Māori と New Zealand European の項目を参照

## 付録

### マオリ関連の児童文学作品一覧（153 冊）

ニュージーランド国立国会図書館の蔵書から検索した 128 冊、エスター・グレン賞にて候補に挙げられたマオリ関連作品 11 冊、ラッセル・クラーク賞にて候補に挙げられたマオリ関連作品 29 冊が対象。なお、重複した作品（重版も含む）は除いてある。

#### 凡例

- 【EG】 エスター・グレン賞候補作品、【RC】 ラッセル・クラーク賞候補作品、【マ著】 著者がマオリ系、【マ単】 キーワードがマオリ語でも書かれている作品、【マ併】 文章が英語に加えてマオリ語でも併記されている作品、【マ集】 マオリ語の語彙集が添えられている作品、【マ出】 同時期にマオリ語でも出版されている作品

	題名	著者	備考
1944	The book of Wiremu	Morice, Stella	【EG】 マオリ少年の日常を描く話
1946	Myths and legends of Māoriland	Reed, A. W.	【EG】 マオリ神話のまとめた話
1963	Turi — the story of a little boy	Powell, Leslie C.	【EG】 マオリ少年の話
1969	Nuki and the sea serpent : a Maori story	Park, Ruth	マオリの物語
1972	Hapi and the morepork	Bermingham, Iris	マオリの物語
1976	Freedom is a wobbly sack	Minturn, Peter	マオリが題材にされた物語

ニュージーランドにおける二文化主義（秋山真弓子）

1981	Mrs McGinty and the bizarre plant	Bishop, Gavin	【RC】【マ著】
	The kuia and the spider	Grace, Patricia	【RC】【マ併】マオリの老女クイアと蜘蛛の話(2011年改訂版出版)
1983	The house of the people	Bacon, Ron	何かをつくる時のマオリの規則に関する話
1984	Watercress Tuna and the children of Champion Streer	Grace, Patricia	主人公がマオリや他の太平洋諸島からお土産を受け取る話
1986	Pukunui the astronaut	Waerea, James	【マ単】主人公が凧を作り空を飛ぶ話(2000年に改訂版出版)
	Taniwha	Kahukiwa, Robyn	【RC】主人公がタニファ（マオリの水の守り神）と旅に出る話(2000、2007年改訂版出版)
1987	A, apple pie	Bishop, Gavin	【RC】【マ著】
	A legend of kiwi	Bacon, Ron	マオリの伝説に基づき NZ にどう生物が来たか伝える話
	Finding Ruth	Renee	【マ著】
	The taniwha's afternoon snooze	Trussell-Cullen, Allan	【RC】マオリの架空の生き物の話
1988	The legend of the seven whales of Ngai Tahu Matawhaiti	Whaanga-Schollum, Mere	【RC】【マ併】古い伝説に伝わるマオリ部族の話(2005年改訂版出版)
1990	Katarina	Bishop, Gavin	【RC】【マ著】1860年代のマオリ少女の話になぞらえた内容
	Tangaroa's gift = Te koha a Tangaroa	Whaanga-Schollum, Mere	【EG】【RC】【マ著】【マ出】美しい貝を手に入れる話
1992	Becoming bicultural	Ritchie, James	二文化主義の百科事典
1993	Paikea	Kahukiwa, Robyn	【RC】【マ著】
1994	Kahukura and the sea fairies	Cartwright, Pauline	【RC】マオリの民話
	The korouna and the mauri stone	著者不明	【マ出】主人公が自然を取り戻そうと頑張る話
	The trolley	Grace, Patricia	【マ出】クリスマスに子どものためにトロッコを作る話
1995	Kapai and the kauri trees	Uncle Anzac	【マ単】キーウィ（鳥）が昼間にも出かけるようになる話

	Kapai bungy jumps	Uncle Anzac	【マ単】主人公の叔父が主人公とその友人を遊びに連れていく話
	Kapai goes whale watching	Uncle Anzac	【マ単】主人公が叔父と友人と町へ遊びに行く話
1996	Maui: legends of the outcast: a graphic novel	Sullivan, Robert	【RC】【マ著】
1997	Because we were travellers	Lasenby, Jack	【EG】部族を抜けて否定され生き抜く話
	Little Rabbit and the sea	Bishop, Gavin	【RC】【マ著】
1999	Bridie's cat = Te poti a Bridie	Heaslip, Peter	【マ併】
	Pukunui	Waerea, James	【マ集】海のそばに住むマオリ少年の話（2009年改訂版出版）
	Pukunui's hangi	Waerea, James	【マ単】主人公の住む村に訪問者がやってくる話
	Tamatoa and the river journey	Stokoe, Julian	主人公が友人とともに叔母を訪ねる話
	Tamatoa and the volcano	Stokoe, Julian	主人公がキャンプファイヤーの煙を火山の煙だと勘違いする話
	The house that Jack built	Bishop, Gavin	19世紀NZのように主人公が家を建てる話（マオリ伝承に触れつつ）（2012年【マ併】の改訂版出版）
2000	Nanny Mango	Walsh, John	【マ単】マオリ系の主人公がいじめに合い叔父に相談する話
	Pukunui and his friend Moata Mao	Waerea, James	【マ単】主人公がハンターに追われるモア（鳥）を見つける話
	Stay awake, Bear!	Bishop, Gavin	【RC】【マ著】
	Taking Teddy tramping	Kelly, Lindy	パケハの主人公が祖父からマオリが使用していた木についてきく話
	Tamatoa and the great tree	Stokoe, Julian	主人公が落ちた鳥の卵を見つけて巣に帰そうとする話
	The puriri tree	Tawhara, Merito	【マ出】主人公の祖父が大きな木になるという話
	Timo and the kingfish	Reedy, Mokena Potae	【マ出】船から落ちるとタンガロア（マオリの神の一人）が現れる話
2001	Dear moko	Everitt, Henare	【マ出】祖父は孫に窓を新しくするか質問する話

ニュージーランドにおける二文化主義（秋山真弓子）

	Double surprise	Kenny, Rihia	【マ出】マオリの子カラとその家族の話
	Hine's rainbow	Holloway, Judith	【マ集】主人公が亡き妹のお墓を訪れる話
	Nnny Mihi and the rainbow	Drewery, Melanie	【マ単】主人公のもとに孫が来て楽しむ話
	Taming the taniwha	Tipene, Tim	【EG】【マ出】いじめっ子と仲良くなる話
	The Kiwi that was scared of the dark	Darroch, Bob	【マ出】幼いキーウィ（鳥）が夜に一人で出歩く話
	The last whale	Van de Weert	【マ出】主人公とその同級生が1920年代を考える話
	The Pipi and the mussels	Meharry, Dot	【マ出】主人公とその友人がクジラに頼みごとをしに行く話
	The thief of colours	Brown, Benjamin	【マ出】主人公が色を盗んでいたのを持ち主に見つかる話
	Visiting the birthday tree	Kelly, Lindy	パケハの主人公が祖父と森を訪れる話
2002	A fishing story	McMillan, Dawn	少女がマオリ系の祖父の話聞く話
	Kotuku saves the day	Ford, Vince	【マ併】事故にあったパケハ家族を主人公が助ける話
	Music of the bush	Kelly, Lindy	パケハの主人公がマオリの楽器を学ぶ話
2003	Hinemoana and the fairies	Boxel, Jodi van	祖母から贈り物がくる話
	Koha	Kahukiwa, Robyn	【マ出】主人公が怪物に餌をやり代わりに網をもらう話
	Matariki	Drewery, Melanie	ある家族がマオリの新年と祭日の意味について語る話
	Oh hogwash, Sweet Pea!	Rainforth, Hannah	【RC】【マ出】
	Tane's weta	McIvor, Jennifer	【マ出】主人公が作った弱い生物を森の危険から救おうとする話
	Tarawera's pink terrace children	Newson, Natalie	9歳のマ少年視点から1886年の火山噴火を振り返る話
	The three billy-goats Gruff	Bishop, Gavin	【RC】【マ著】
	The woven flax kete	Belcher, Angie	マオリ系の主人公が学校のクラスで森へ行く話
	Thunder Road	Dawe, Ted	【EG】幼少期にマオリについて学んだパケハ作家

2004	A new song in the land	Beale, Fleur	【EG】歌が上手く注目された実在のマオリ少女の話
	Child of Aotearoa	Benseman, John	【マ出】ワカ（マオリ伝統のカヌー）に乗りながら NZ を見ていく
	Cuzzies find the rainbow's end	Kapai, Tommy	【マ単】少年パイが出かける話
	Cuzzies meet the Motuhua Shark	Kapai, Tommy	【マ単】叔父ツツとともに出かける話
	Down in the forest	Cooper, Jenny	【RC】
	Fifty-five feathers	Brown, Ben	【RC】【マ著】
	Glow-worm night	Long, Don	【マ単】家族でマタリキ（マオリの祝祭）に行く話
	Hinepau	Bishop, Gavin	マオリ少年が違いを恐れて部族を出る話
	Koro's medicine	Drewery, Melanie	マオリの伝統的な薬草の話
	Nanny Mihi's treasure hunt	Drewery, Melanie	【マ単】主人公が孫に宝探しをさせてあげる話
	Nga raukura rima tekau ma rima	Benjamin Brown	【マ併】マオリ系の主人公が友人のために鳥の羽をもらおうとする話
	Pounamu's stones	Meharry, Dot	主人公が祖母から魔力の宿る宝石を覚えてもらう話
	Taming the sun: four Maori Myths	Bishop, Gavin	【RC】【マ著】4つのマオリ神話
	The biggest number in the universe	Leibrich, Julie	【マ併】
The trees	Darroch, Bob	【マ単】自然豊かな NZ の田舎をまわる話	
2005	A booming in the night	Brown, Ben	【RC】【マ著】
	Haere:farewell Jack, farewell	Tipene, Tim	少女の目線からマオリ家族のある一年を見る
	Kiwi Moon	Bishop, Gavin	【RC】【マ著】
	Nanny Mihi's Christmas	Drewery, Melanie	【マ単】主人公が孫のためにクリスマスの計画を立てる話
	The family tree of the rainbow	Ruka, Raymond	【マ集】マオリ出身の祖母が孫に話を聞かせる話
	The waka	Prior, Jean	【RC】NZ の野生生物とマオリをノアの箱舟になぞらえる話

ニュージーランドにおける二文化主義（秋山真弓子）

	The whale reder	Price, Willard	主人公が祖父に認められない苦悩を描いた話
	Waka Wairua : the spirit waka	Morrison, Yvonne	火山噴火をワイルア（マオリの神の一人）が予言した話
2006	Animal adventures	Heck, Lutz	【マ併】
	Matatuhi	Drewery, Melanie	【マ出】パケハの養子になったマオリ系の主人公の話
	New legends of Aotearoa : NZ birds	Swadling, Irene	【マ単】NZ鳥とその環境に関する伝統的な6つの話
	No ordinary flowergirl	Bennetts, Marlene	主人場が祖母の結婚式のためNZへ行く話
	Riding the waves: four Maori myths	Bishop, Gavin	【RC】【マ著】マオリ神話
	The girls in the kapahaka	Belcher, Angie	【マ集】ハカ（マオリの伝統的踊り）集団に入る話（2008年改訂版出版）
	The talking stick	Meharry, Dot	主人公がカウリ（マオリの伝統的な巨木）に願い事をする話（2008年改訂版出版）
	The tree hut treaty	Grace, Wiremu	4人の子供がワイタンギ条約に基づいて約束を結ぼうとする話
2007	Cry-baby moon : a story	Mataira, Katarina	マオリの物語
	Dad's Takeaways	Drewery, Melanie	【RC】マオリ家族が海にピクニックへ行く話
	Good morning, good night	Milne, Rebecca	幼いキーウィ（鳥）の話
	Horeta and the waka	Campbell, Gordon	船長と乗組員の様子がマオリ少年の視点から語られる話
	Rats	Bishop, Gavin	【RC】【マ著】
	The dawn	Davey, Mike	マオリ少年ツイの友人キーウィ（鳥）が殺される話
	The treaty house	Orams, LeAnne	主人公が旅に出て条約の家について知る話
2008	Kakariki and the hangi	Julia Sloane	【マ単】主人公がマラエ（マオリの催事場）建設中に問題が起こる話
	Kakariki and the kai	Julia Sloane	【マ単】主人公が友人（パケハ）を待たずに食事を始める話
	Kakariki and the miti	Julia Sloane	友人の母親が病気のため代わりにお使いに行く話

	Tarore and her book	Cowley, Joy	【マ単】 1830s のゴスペルに優れたマオリ少女 Tarore の実話
	There was a crooked man	Bishop, Gavin	【RC】【マ著】
2010	Between the flag	Ford, Vince	【マ併】
	Shadow of the Boyd	Menefy, Diana	【EG】 1809 年の事件をめぐるマオリとパケハの少年の友情の話
	Supervise children near water	Ford, Vince	【マ併】
2011	Always leave jug cords alone!	Ford, Vince	【マ併】
	Always wear your lifejacket!	Ford, Vince	【マ併】
	Bruiser	Bishop, Gavin	【RC】【マ著】
	Fantail's quilt	Hay, Gay	【マ単】 マオリ系の母親の話
	How Maui slowed the sun	Gossage, Peter	一日の時間が短いと感じたマウイが時間延ばす話
	Lest we forget	Tu'akoi, Feana	【マ出】 主人公が母親と兵士のパレードに行く話
	Picturing difference	Rochow, Kathrin	絵本の歴史を描く
	Rāhui (Māori edition)	Szekely, Chris	【RC】【マ出】
	The fish of Maui	Gossage, Peter	マオリの神話
2012	Grampy Snorepants	Kippenberger, Mary	【マ単】 子と孫と一緒に暮らす話
	Pihi ake, tipu ora	McNaughton, Talia Oreti Pert	【マ単】 絵本を扱うときの参考書
	Remember that November	Jennifer Beck	【マ出】 スピーチ大会で主人公が過去の侵略について発表する話
2013	Bruiser and the big snow	Bishop, Gavin	【RC】【マ著】
	Taka ki ro wai	Kaa, Keri	【RC】【マ出】
2014	Ben's buddies = Nga hoa o Ben	Holt, Sharon	【マ併】 障壁を壊す話

	Conrad Cooper's last stand	Agnew, Leonie	【EG】パケハ少年がマオリの神に願い事をする話
	In an emergency dial 111	Ford, Vince	【マ併】
	Keep looking while you're cooking!	Ford, Vince	【マ併】
	Manukuara and the rata tree	Potangaroa, Joseph	【マ単】キーウィ（鳥）が他の動物と会う話
	Maori child	Kahukiwa, Robyn	マオリの伝説を通して生命について伝える話
	Moreporky madness!	Little j	【マ併】マオリ系の主人公の話
	Moreporky	Potangaroa, Joseph	タニファ（マオリ伝説の水の守り神）の話
	Superhero Levi!	Kahukiwa, Robyn	マオリ少年がカササギから少女を助ける話
	Stay away from the stove	Ford, Vince	【マ併】
	Stranger danger!	Ford, Vince	【マ併】
	The adventures of Walter Weta and Flutter the Fantail	Dennis, Angie	【マ併】
	The fish story	Young, Christine	【マ単】
	The song of Kauri	Szymanik, Melinda	幼い主人公が成長し変わった世界を見る話し
	Too close to fire	Ford, Vince	【マ併】
2015	Counting in the South Pacific	Jaques, Jill	マオリを含めたポリネシア地域の人々の話
	Go, green gecko!	Hay, Gay	マオリの信念に関する話
	Hush : a Kiwi lullaby	Cowley, Joy	【マ併】歌
	John Joe's tune;how NZ got its nation anthem	Atkinson, Tania	【マ併】校長が国歌つくる話
	Maui nad the goddess of fire	Bishop, Gavin	いたずらっ子の主人公がマオリの神のもとへ送られる
	Row, row row your waka	Larsen, Rebecca	【マ単】自身のワカ（マオリ語で精神）と合う相棒を探す話
	10 goofy geckos	Roberts, Ngaere	【マ併】10匹のカエルの歌

2016	Jack feels big. 1	Millen, Adam	【マ単】感情をどう扱うか伝える話
	Ko tera atu o nga taitama	Thatcher, Stephanie	貧しい少年が自分だけの肩書手に入れる話
	10 plucky penguins	Roberts, Ngaere	【マ併】10匹のペンギンの歌
	The Kiwi hokey tokey	Mahardhika, Stevie	【マ併】動物が伝統的な歌に合わせて踊る話
	The seven kites of Matariki	McClintock, Calico	伝統的な物語になぞらえた話
	Tuna and Hiriwa	Goddard, Ripeka Takotowai	ウナギは満月のときには捕まえづらい話

以下のホームページより筆者作成

(LIANZA Esther Glen Junior Fiction Award, LIANZA Russell Clark Award, National Library of New Zealand,  
New Zealand Book Council, Penguin Books New Zealand)